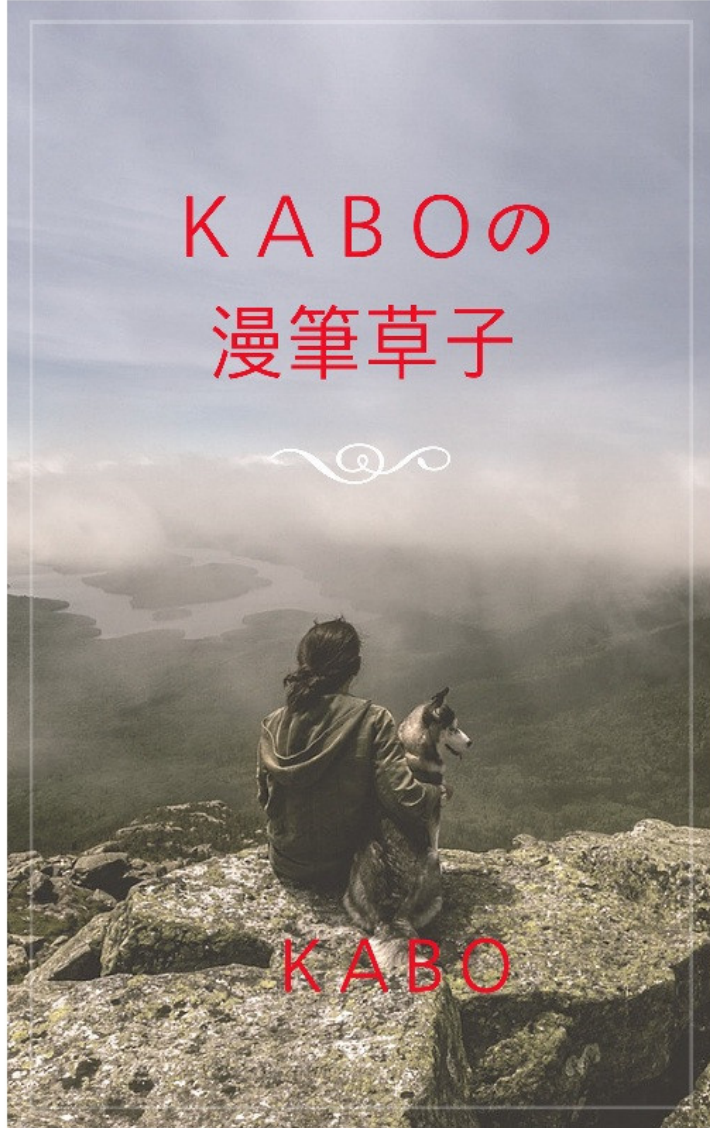


K A B O の
漫筆草子



K A B O



目次

トイレが教えてくれた	1
腸列車	2
ルーブルでアンビリーバブル！	3
フィレンツェで幽霊初体験	5
フィレンツェで幽霊初体験	6
忘れ物の天才と心配性の私	8
観音さま現る！	9
生まれる前と死んだ後	10
瞬時便秘解消法	11
瞬時便秘解消法	12
究極の選択	14
究極の選択	16
私の中のコップの水	18
私の中のコップの水	20
シンクロシティなのか?!	21
シンクロシティなのか?!	24
墓が燃える!?.	25
墓が燃える!?.	27
墓が燃える!?.	28
墓が燃える!?.	29
お月さま、こんばんは	31
道きく人、きかれる人	33
なおも道きく人、きかれる人	34
なおも道きく人、きかれる人	36
サンマと火事場の馬鹿力	37
知らぬが仏?!	40
知らぬが仏?!	42
にゃんこ先生の教え	45
にゃんこ先生の教え	47
にゃんこ先生の教え	50
タウンズビル回想	52
アイ アム ゲッコー！	54

キモかわいい守り神	56
ベトナムで肝だめし	57
ベトナムで肝だめし	59
古今東西、ウンを踏む女	60
古今東西、ウンを踏む女	62
古今東西、ウンを踏む女	64
「虎の穴」出身?!	66
「虎の穴」出身?!	68
「虎の穴」出身?!	69
おっばいがいっぱい!	71
金魚にヤキモチ焼いた子	73
絶妙なバランス	75
1万分の1の確率!	76
オオトカゲと泳いだ男	78
奇跡の上海蟹あんかけ麺	80
奇跡の上海蟹あんかけ麺	82
奇跡の上海蟹あんかけ麺	84
屁理屈こきの幸せ論	85
知りたがりのホトトギス	87
号泣するネアンデルタール人	89
号泣するネアンデルタール人	91
国内旅行でダブルブッキング?!	93
またしてもダブルブッキング?!	95
ダブルブッキングで試される人間力!?	97
青なのか緑なのか (その1)	100
青なのか緑なのか (その2)	102
私流「○○って思ってるんだ」の術(その1)	105
私流「○○って思ってるんだ」の術(その2)	107
77億通りの愛のカタチ	109
後出しジャンケンの女	111
映写室の住人	113

奥付

トイレが教えてくれた

ある日、お腹が痛くなりトイレへ駆け込んだ。ギリギリセーフ。排泄の欲求。大なり小なり、これだけは何人たりとも我慢できない欲求だ。空腹は抑えられても、排泄だけは、いくら我慢強い自分でも抑えられない現象だ。そして、毎回、トイレがあることに感謝する。

トイレの個室でふとひらめいた。そうだ、これだったのだ。生理的現象と同じくらい、自然な欲求。子どもの頃から腸の弱かった私は、トイレとは縁があった。場所や時間のおかまいなしにトイレが私を呼ぶ。というよりどうしても行きたくなる・・・。それくらい、どうしようもなく自然なこと。それは、やはり書くことだったのだ。

長いこと、自分が本当にやりたいことを探してきたような気がする。これまでも業務として何かを書くという作業はあったけれど楽しいものではなかった。書くことは好きだったけれど日記はいつも三日坊主。そのうち日々の暮らしに流されて、ペンを握るのも忘れ、白紙のノートだけが溜まっていった。

日記も然りだが、色々なことを楽しめる余裕などない時代が長く続いた。色々と彷徨ったり冒険もしたりした。使命とか天職とかそんな課題を自分に与え、外の世界に答えを探そうと頑張っていた時期もあった。ずっと迷走してきたのかもしれない。

そんな私が、このタイミングで、書くことはトイレで出すことと同じくらい自然な自己表現の欲求だったとやっと気がついた。排泄の欲求と表現の欲求は、生理学的にどう見ても一緒のステージには居合わせないと承知しているけれど・・・。とにかく、トイレが気づかせてくれた。

トイレさん、ありがとう。トイレ様にまつわるエピソードは数々あるので、またの機会に伝えられたら嬉しい。

フーツ、間に合った。そして、まだ間に合う。とにかくセーフだ！ トイレさん、教えてくれてありがとう。

腸列車

夢は不思議だ。突拍子もない体験をしたり、つじつまの合わない現象が起きたり、絶対にありえない状況に陥ったりする。奇想天外な夢を時々見ることがある。夢を映像に残せたら、凄い映画ができるのと思うことがあるが、反面、とても怖すぎて耐えられないシーンもたくさん出てくる。

何年前か、ショッキングな夢を見た。あまりにも、リアルだったので、今でも脳裏に焼きついている。走る列車の先頭車両の上になぜか女の人が一人仰向けで寝ている。女性は服を着ていたが、その人の身体から、突然、腸がズルズルッと真っすぐに飛び出てきた。それは、天然色に輝き、ツルツルとピンク色に光っていて、車両の数だけどこまでも伸びていく。いったい、どこまで伸びるのだろうか。列車は貨物列車なのか、車両がどんどん増えていった。えーッ、腸ってこんなに長いのか？ それを上から見ている私。

いやー、本当に長い腸だった。暴走列車ならぬ腸列車。けれども、怖い感じはしなかった。衝撃的だったけれど、何か見事な光景だった。

いつだったか、たしか人間の腸の長さは9 mくらいもあると聞き驚いたことがあった。そして、日本人の腸は長いという話も聞いたような気がする。そんなことを脳のどこかで記憶していたのだろうか。

そう言えば、ちょうどその頃、便秘に悩んでいて、もしも体内の腸を全部取り出してきれいに洗うことができたらどんなにスッキリするだろうなどと思うことはあった。だから、非現実的なようでも、夢はどこかしら現実と繋がっているようにも思える。

まさしく、あの腸列車の女性は自分自身だったのかもしれない。脳って、本当に神秘だ。

ループルでアンビリーバブル！

話題がまたトイレ関連になってしまうが、忘れられない思い出がある。ずいぶん前の話。まだまだ元気バリバリの時代、一度だけパリに行ったことがある。

短い日程だったが、お決まりの観光コースを制覇し、私達は憧れのループル美術館を訪れた。有名なモナリザの絵の前は人だかり、辛うじて見学者の肩越しから、何とかあの微笑を拝むことができた。写真を撮ることはできたけれど、ガラスの中に納まっていたので光がガラスに反射して肝心の顔が映っていなかった。ミロのビーナスも、もちろん美しかったが、私が目を奪われたのは、サモトラケのニケの像だった。思わず、立ちすくむとはこのことか。たいへん感動し、館内のショップでニケのグッズを買い求めた。

そうこうしていると、いつものようにトイレに行きたくなってきた。案の定、トイレの入口は大行列。長い時間いると、誰もがみなトイレへ引き寄せられてしまう。生理現象は、世界共通だ。しかも、この人数だから、緊急事態発生の際にとっては一大事だ。幸い、その時は緊急性が低かったので最初は余裕だったが、順番待ちが長いと、さすがにだんだん逼迫してくる。

15分ほど待って、やっとトイレの個室前に辿り着いた。しかし、ここであることを発見。入室する人達は、トイレのドアノブあたりに何かを入れて入っていくではないか。よく見るとコインだ。なんと、お金を入れないとトイレのドアが開かない仕組みなのだ！嫌な予感。財布を確かめると硬貨が一つも入っていない。ガーン。先ほど、ニケのグッズを買った際に硬貨を全部使い果たしてしまったのだ。しかも、周りに知っている人は誰もいない。30分近くも並んだのに…。

仕方なく退散し、連れに硬貨を貰いに行った。金額は忘れたが、ラッキーにも、一枚だけ硬貨を持ってきていた。コインを握りしめ、気を取り直し再びトイレへ出陣。そして、やっと個室に入室できた。

だが、そこでまた一大事！なんと、便座の上にウンがドーンと乗っているではないか!! 便器ではない、便座の中央だ。しかも尋常じゃない量だ。エーッ、ありえない?!というか許せない！せっかく入室できたのに。また並び直せというのか？だが、オートロック式なので、もう一度硬貨が必要だ。両替してまた並び直すか…。いや、もう限界だ。もう無理。けれど、この状態ではとても用は足せない。

仕方がない！意を決し、息を止め、トイレトペーパーをグルグル巻きにしトイレ清掃を決行。そして、泣く泣く用を済ませたのだった。

ウンの付いたトイレに出遭う私も私だが、お金を払って入るトイレでこんなことがあって良いのか!?何処の国のどなたか知らないけれど、せめて少しは拭いて出てきてほしかった。生理現象は人類共通でも、エチケットやマナーは千差万別ということか。郷に入っては郷に従えというのか。けしからん！と怒り心頭で美術館を後にしたのを覚えている。運が悪いのか良いのか、無事に用を足せたのだから、ウン（運）が良かったということにしよう。

サモトラケのニケは美しかったけれど、ルーブルのイメージ、パリのイメージが、あのトイレでいっぺんに変わってしまった。あとで調べると、無料のトイレもあったようだが、今となれば旅の良い思い出になっている。

海外のトイレ事情は日本とは違うとよく聞かすが、あの一件以降、外国のトイレの扉を開ける時は、ますますドキドキするようになった。そして、ウン試しに、また何処かへ行きたくなくなってしまうのだ。

フィレンツェで幽霊初体験

幽霊とか心霊現象に興味はあったけれど、実際に見たことはなかった。

母と二人で、イタリアに行った時のこと。団体旅行で9日間ほど、ご一行様と共に過ごした。格安というほどではなかったが、限られた日数でブーツの先から上までの観光地を訪れるので、スケジュールはけっこうハードだった。バスで何百キロも移動しなければならない日もあった。ホテルも毎度変わるから、朝は暗いうちから身支度。毎日、まるで旅芸人のようだった。はじめて訪れる土地はいつもワクワクするけれど、時差ボケや寝不足が続くと、さすがにだんだんと疲れてくる。バスの中では常に爆睡していた。

そんな旅も終盤に入り、私達はフィレンツェを訪れた。真夏だったので、お日様が燦々としていた。中世ヨーロッパの街並み。デコボコした石畳が日の光を照り返し、油断していると焦げそうになった。ウフィツ美術館、ダビデ像、歴史ある寺院や教会を汗ダラダラ流しながら、ツアコンのお姉さんに置いて行かれぬよう必死で歩いた。空がとても青い。そして、太陽が近い。一年分の日光浴をした気分だった。

さて、問題はその時に泊ったホテルだ。名前は覚えていないが、グレードでいうとたぶん星の数の少ないランクだったと思う。中世っぽい、年季の入った古めかしい感じのするホテルだった。

部屋に入って驚いたのが間取りだ。ドアを開けるといきなり寝室。そして、下へ降りる階段が付いていた。いわゆるメゾネットタイプだ。けれど、上に部屋があるのではなく下に降りていくタイプは珍しい。まるで地下室に降りる感じだった。だが、下の部屋にも窓があり、よく見るとそこは地上一階だった。なんだか変わった作りに思えたが、ヨーロッパでは普通なのだろうか。

ところで旅も後半。身体がクタクタになってきたこともあり、私達は些細なことで親子喧嘩の最中だった。いつものようにご一行様達と夕食を済ませた後、部屋に戻るとお互い口も利かず寝支度をした。2階にシングルベッドが二つ。1階にはキングサイズの

ベッドがドーンと一つあった。1階がメインルームなのか、立派なトイレとバスルームが付いていた。

疲れていたのか母親は、サッサと2階のベッドに潜り込み毛布をかぶって寝てしまった。私も2階のベッドで寝ようかと思ったが、喧嘩の最中だったこともあり、あえて1階に降り、キングベッドで寝ることにした。

だが、眠いのだけど、なんだか落ち着かない。見るとクローゼットは鏡貼りだった。ギョッ。夜中に目が覚めたら何か怖い。なので、電気を点けて寝ることにした。明るくて眩しいくらいだった。これなら安心だ。幽霊は明るいところには出てこないと思っていたから。

明るすぎて眠れなくても怖いよりはマシだ！と、ウトウトしていたら、足元に誰かいる！！電気が煌々と点いているから姿がはっきり見えた。

フィレンツェで幽霊初体験

それは金髪の青年だった。金髪の男性が私の足元に横たわっているのではないかと。そして、何故かギターを弾いている。でも、よく見ると両腕が無い。腕が無いのに、どうやってギターを弾いていたのか？後で考えると不自然だったが、その青年はニコニコと笑って私を見ているのではないかと！

ヒョエー!!出たー！ といつか居るー!!明かりが点いているから周りの景色もしっかり見える。

あなたは誰ですか〜?!と叫ぶ間もなく、スーッと姿が消えた。それからはもう、怖すぎて朝まで眠れず仕舞いだったのは言うまでもない。こんなだったら、やせ我慢せず、母と一緒に寝れば良かった。とても後悔した。まんじりともせず夜を明かした。

朝になり、2階の母親の元へ行くと「あなた、1階で寝ていたの？」と言われた。母が言うには、夜中じゅう、母のベッドの周りを歩き廻る物音がミシミシ聴こえたので、てっきり私がウロウロと荷物の整理をしていると思い、うるさくてずっと毛布をかぶって寝ていたらしい。そんな…。

私は私で昨晚の体験を夢中で説明した。二人とも親子喧嘩どころではなくなった。けれども、まあ、お互いに疲れていたし、夢だったかもしれないよね～と慰め合い、逆に仲直りができたのは良かった。

ところが、続きがまだあった。その朝、ご一行様達と朝食を食べたときのこと。ちょうど、私達の隣の部屋に泊っていた中年のご夫婦と一緒にテーブルになった。そのご夫人が、昨晚とても怖い思いをしたと言うのである。

1階のベッドで一人で寝ていたら、夜中、誰もいない筈のトイレの水がザーッと物凄い勢いで流れ出したようだ。夫人はあまりにも怖くて、真夜中に重たいスーツケースを必死で2階に持っていき、ご主人のベッドに潜り込んだようだ。

ご主人は、「目が覚めたら、奥さんの顔が目の前にあったので、ボクにはそのほうがよほど怖かったよ。」と苦笑していた。

けれど、笑いごとではない。これは、お隣さんにも出たということか？ やはり、居たのだ！！ けれども、幽霊って壁を突き抜けて移動できるのか？ 我々とは次元が異なるから、そんなことは簡単なのか？ つけ加えるなら、物体(?)として見たのは私だけだった。だから同一人物(?)なのかも、わからない。

実際のところ、あの出来事は何だったのか…。今も思い出すたび謎だけど、不思議な体験だった。それにしても、外国で幽霊に会うとは…。

その後、外国でも日本でも幽霊らしきかたにはお会いしていない。

忘れ物の天才と心配性の私

夫は出がけによく忘れ物をする。玄関を出た後、忘れた！と言って戻ってくるのが実に多い。数えたことはないけれど、ほぼ毎回到近い。忘れ物はないの？と声をかけられたにも関わらずだ。子どもではないので、いちいち、指さし確認をして忘れ物撲滅を徹底させることもないが。むしろ、不思議なのは「ほら、まただ！」と私に窘められても、まったく動じないところだ。「どうってことないさ。」とでも言いたげに口笛吹きながら、毎度同じことをくり返している。馬耳東風。振りなのか何なのか、楽しんでいるようにすら見える。

一方の私は、忘れ物で戻ってくるのは極力避けたいほうである。ふつうは、皆そうだろう。とくに、一分一秒を争う忙しい朝に、大事な物を忘れたことに気づき、再び部屋に戻るパターンは悲惨だ。そんな時に限って、マンションのエレベーターはなかなか戻ってきてくれない。全速力で駅まで走るも、予定の電車に間に合わず…。汗ダラダラ、セットしたヘアはみだれ髪。そこからは負の連鎖が展開し、残念な一日となることが多い。そんな経験を味わうのがとても嫌なので、持ち物の点検には余念が無い。

にもかかわらず、忘れてしまった日のショックはかなり大きい。大袈裟かもしれないが、忘れた自分に腹が立つ。そして、自分は忘れ物ごときに振り回される小っちゃい人間だと思ひ知るのだ。

かたや、夫はどうだろう？ きっと、忘れ物する自分もOKに違いない。夫曰く、時間に余裕を持たせないからそうなるのだと。たしかに、夫は忘れ物を取りに戻ってきても十分に間に合う計算で動いている。すべて想定内ということか。

そうだ。ギリギリセーフで起床し、アウトな時間の使い方をしている者に余裕など生まれえない。余裕の無さが余計な心配を生み、ストレスがたまる。

安心したいがために要らない心配をしてしまうとは。なんて妙なロジックだ。単純に、早く寝れば良いだけの話か。だんだんと身も蓋もない結末になりそうなので、ここは一つ、私の心配性は長年の習慣が作り上げた賜物だということにしよう。

そもそも、夫のように、忘れ物など大したことではないと思えたら楽になれるだろう。私もそれくらい腹をくくれたら、少しは大きな人間になれるのか。

いくつになっても、夫から学ぶことは多い。

観音さま現る！

もう7、8年も前に見た夢の話。ほとんどストレス無くのんびりと過ごしていた頃だった。

夢の中に、突然「観音さま」が現れた。「観音さま」の姿って、それまでじっくり見たことがなく、興味も無かったので、実際どんな姿かたちをしているのかも知らなかった。けれども、たしかに「観音さま」だった。そして、私にこう言った。

『ぜんぶ、見ていますよ。』

ぜんぶって…。夢の中だったけれど、涙が溢れてきた。色々あったけれど、当時はその色々も無くなり、自分ではお気楽にルンルンしていた時期だったが、この言葉は私の涙腺を崩壊させた。

誰もがそうのように、年の数だけ色々なことは経験してきたけれど、そのすべてを見てくれていた方がいたんだ…。なんだか無性に泣けてきた。夢の中でおいおい号泣して目が覚めた。

いやあ、「観音さま」って本当にいるんだ！ それにしても、なぜ、「観音さま」なのだろう？ 気になって、ネットや本で「観音さま」について調べた。その姿は夢で見たものと同じだった。

ちなみに、守り本尊というものがあるそうで、自分の守護仏は「千手観音菩薩」だそうだ。それからは、「観音さま」がなんだか身近に感じられ、好きになった。「好き」という表現は畏れ多いのかもしれないけれど。

残念ながら、「観音さま」はそれ以降一度も出てきてはくれない。けれど、誰の心の中にも、そんな存在が居るのだと自分なりに確信した。

ダメな姿も頑張っている姿も恥ずかしい姿も…。たとえ一人ぼっちで孤独を感じていても、こんな自分をどこかで見てくれている存在があると思えたなら、とても心強い。

それは、お天道様なのか、宇宙なのか、神と呼ぶのか…。信じるのも信じないのも人それぞれ自由だが、もしかしたら、自分の心そのものなのかもしれないと思うことがある。

生まれる前と死んだ後

人は死んだら、どうなるのだろうか？

死んでしまったら、自分はどこに行くのだろうか？ 真っ暗闇なのか、息ができないほど苦しい世界なのか、とても痛いのか…。

わー、怖い。なんたって、死んだことがないから、どうなるかわからない。もし、死んでしまったらどうしよう～。子どもの頃、夜眠る時にそんなことを考えては、とても恐ろしくなることがあった。

けれど、とても単純なことから、想像しても怖くならなくなった。

小学生だった私は、テレビで、たまたま昭和30年代初めの人々の映像を見ていた。昔の街並みを歩く人達の様子が白黒フィルムで流れていた。家はまばらで、着物姿の人も多く、まるで映画のセットのようだった。私が生まれる前の世界だ。当たり前だけれど、自分はまだ生まれていない時代。

そのとき、ふと思った。「あれっ？」私がまだ生まれていないその時代に、私はいったいどこにいたのだろうか？ まだ、この世に生まれ落ちていないのだから、私はどこにも存在していないのは当然だ。命が無いのだから意識も何もない。痛くも苦しくもないわけだ。

もしかして、死んで命が消えるというのは、生まれる前に戻ると同じことではないのか！ 子ども心にそう納得したら、急に恐怖心が薄れた。ただ、そう思い込もうとしただけなのかもしれないが、その時の気づきは、私にはけっこう重要だった。

実際のところ、無になるのか、生まれ変わるのか、果たしてどんなことになるのか、自分には知る由もないけれど、テレビで見た昭和30年代にただ戻るだけだとイメージするだけでなんだか安心できたのだ。そして、この安心感は、その後の私の大きな支えになっていった。

瞬時便秘解消法

またまたトイレ関連の話題になってしまう。

私の腸の話は以前も書いたが、放っておくと便秘になるわりには突然お腹がくだったりする。たぶん過敏性腸症候群なのだろう。

たとえば、大好きな珈琲。今でこそ普通に飲めているが、学生の頃は喫茶店で珈琲を飲んだ日はもうテキメンだった。仮にデートなんぞしたものなら、悲劇だ。頭の中はトイ

レのことばかり。我慢すべきか行くべきか。楽しいひと時が冷や汗の鍛錬道場に一変した。昔は、ウォッシュレットどころか、音姫ならぬ音消しの救世主も、消臭機能も備わっていなかったから、花も恥じらう乙女には気まずい時代だった。

そんなピーピー地獄との戦いも年を重ねるうちに無くなっていった。耐性ができたのか慣れたのか。さすがに、熱いラーメンを食べた後のアイスクリーム2段重ねともなると、危ないが…。それでも、近年はもっぱら腸を労わりつ、お腹と相談しながら飲食するので、腸のお怒り(?)に触れることが少なくなったのは有難い。

だが、しかし、まだ一つ解明できていない事象がある。それは、本屋さんへ行くと何故だかトイレへ行きたくなる問題だ。満腹だろうが空腹だろうが。これは、いったいどういうことだろうか。それに気づいたのは、何歳頃だったかは忘れたけれど、私の場合、99.8%くらい、かなりの確率で問題が発生する。まず、書店に入り、ズラッと本棚に並んだ本を見ただけでワクワクする。とくに新刊コーナーや面白そうな本達を目にすると期待と欲びで興奮する。どんな本が待っているのか。まずは立ち読みだ！とウキウキするや否や腸が反応してしまう。この刺激がトイレ問題の要因なのだろうと自分なりに解釈している。

けれど、もし、トキメキや興奮が腸への刺激に結びついているとしたら、他の場所はどうかだろう。心ときめく場所は本屋だけではない。たとえば、デパートはどうかだろう？美味しそうな食品から素敵な洋服、何から何まで揃っている店。私の欲しい物がいっぱい詰まっている場所。デパートが一つ自分のものになったらどんなに嬉しいか。毎日がワクワクのパラダイスだー！いまだにそんなことを妄想してしまう。

だが、そんな大好きなデパートに行っても、例の問題はほとんど生じない。大好きなミュージシャンのコンサートはどうか。嬉しくてキャーキャー興奮するけれど、お腹は痛くならない。やはり本屋なのだ！

瞬時便秘解消法

では、本屋さんの何がいったい問題なのか。本が並ぶ縦のラインが、排泄に繋がる神経を刺激するからではないかと言う説を昔聞いたことがある。本当だろうか。たしかに整然と並んでいる本の姿は美しいと思うが、排泄問題との因果関係について詳しく調べたことはない。もしかして、そんな研究をしている人が既にいるのだろうか。だとしたら、私は治験者として歓迎されるかもしれない。というか自分で研究すべき課題なのか?!ちなみに公立の図書館訪問も同様な問題が生じる。そして、規模が大きければ大きいほどその波も大きい。

自分に限って言えることは、デパートよりも遊園地よりもコンサートよりも本屋さんが私の腸を刺激してくれるという仮説だ。

そんなわけで、この年になっても人体実験はまだ続けているが、本屋さんを訪れる際はトイレの場所チェックは欠かせない。たまに、化粧室がどこにも見当たらない店があるがこれは困りものだ。もちろん本屋に行ったからと言って、必ず買うわけでもなく、立ち読みして帰ることが多い。

もっとも危険なのは、気に入った本を眼前にしたときだ。今すぐ読みたい！でもトイレが呼んでいる！化粧室を行ったり来たりする自分の姿は、とても挙動不審だ。誰も見ていないだろうけど(笑)

だが、ある日、ひらめいた。大好きな本屋さんが腸を刺激してくれるのなら、便秘時に行けば一石二鳥ではないか。お金のかからない下剤。これぞ、瞬時便秘解消法だ。かくして、実験開始。深刻な便秘状態ではなかったけれど、やはり、効果があったのだ。ワクワクは便秘までも解決してくれるのだ！お腹ユルユル効果のほうは勘弁してほしいが、便秘解消なら有難い。そして、化粧室が清潔で居心地良ければもう天国だ。

最近、本屋さんに行く機会が減り、実験の検証ができないのが少し残念だが、同じ悩み(歓び?)をもっている人が世の中にいてくれると願いつつ、いつかデータを持ち寄って真偽のほどを検証してみたいと空想している。

究極の選択

生きるべきか死ぬべきか。

ハムレットの中に出てくるセリフ。この言葉だけは私も知っている。

生きてると色々な選択を迫られることが多い。というか人生は日々、選択の連続だ。

いま、この一瞬ですら私は何かを選んで決めて動いている。選ぶからには比較できる対象がある。

無意識に行っていることも、実は複数のものからその瞬間瞬間、自動的に選んだ行動様式なのだろう。

選べる自由。猫だって、ペットフードの違いを嗅ぎ分け、美味しいほうを選んで食べる。お口に合わない皿には見向きもしない。そして、もうその皿しか選択の余地がないとわかると、仕方なくでも食べているようだ。

猫も私も変わらないということか。

意図的に何かを選択できる歓びを猫のナナちゃんを感じているかは不明だが。少なくとも、選択肢がある故の苦悩を抱えてしまう点では、ナナと私は別の生き物だ。

ナナちゃんにペットフードのメニュー表を見せても悩まないだろうから。本能的にただ選び取っているだけなのだろう。猫自身に訊いて確かめたことはないけれど。

いっぽう人間の私は、気がつけばいつも何かを比べている。より美味しいほう。より良さげなほう。そして悩む。なんでも自由に選べられるのは有難いことだけど、比べては悩んでしまう。

食い意地のはっているナナより、私のほうが、よほど欲深い。

けれど、比べて悩んで選んできたことで向上できたこともある。

より良くなりたい。この一心が、人類の文明を発展させてきたのだと言ったら大袈裟だろうか。

反面、比べる知能が進化したことで、悩みや苦しみが増えてしまったのではないだろうか。

選べる自由と比べる苦悩。

ものだけでなく、他人と自分をいちいち比べては思い悩む。

比べるクセ。良しにつけ悪しきにつけ、比べずにはられない。

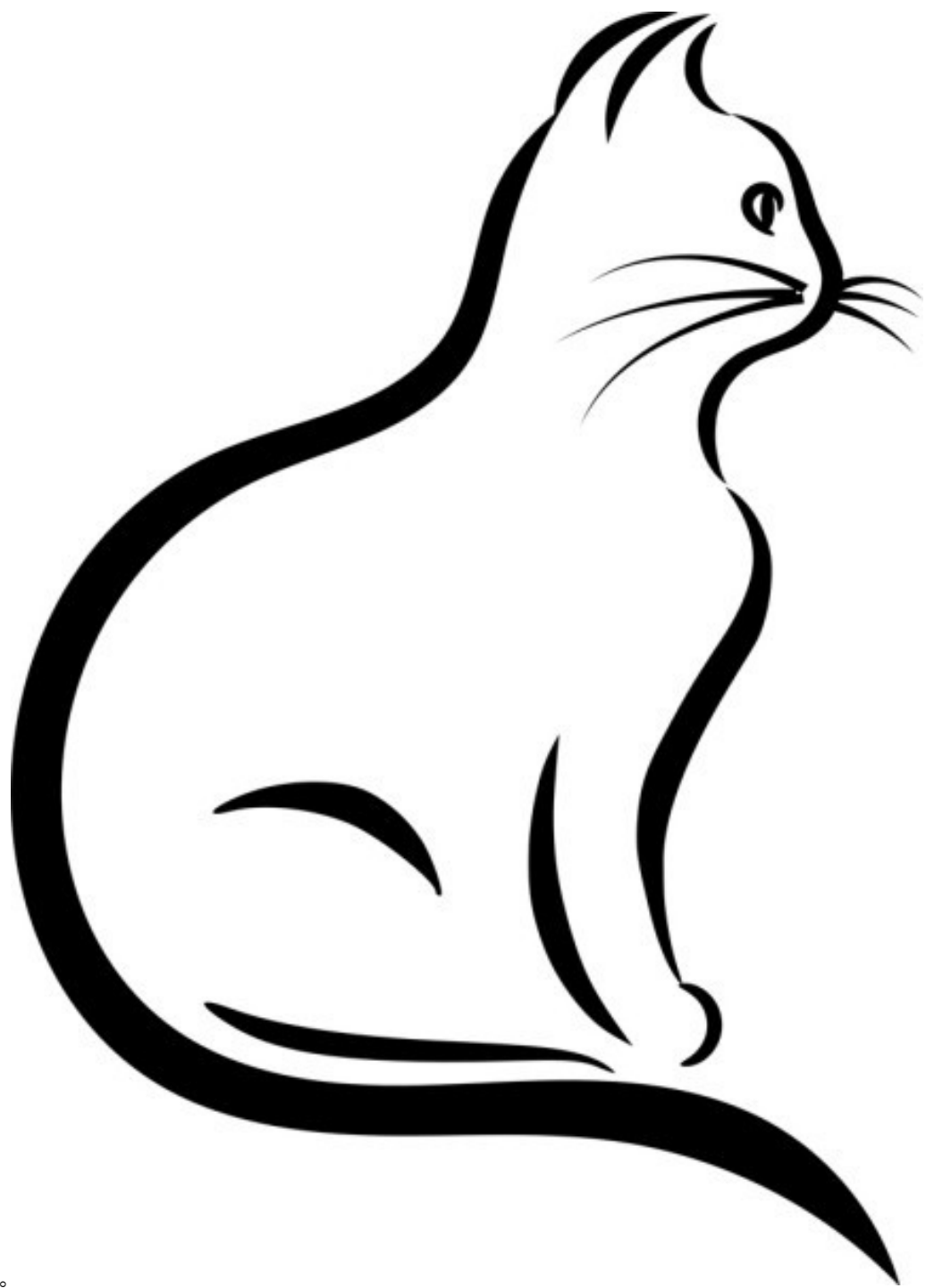
そして、安心したり心配したり。比べることが思考の判断基準の一つになっていることに気づく。

こうやって、猫と自分を比較して論うことからして、もう比べている。

猫とも張り合うなんて、ナンセンスだろうか？

けれども、私はいたって真剣だ。

なぜなら、比べるクセを活用して、前向きに生きる術を自分なりに編み出してきたから。



それが究極の選択だ。

究極の選択

ひと昔か、もっと前、究極の選択クイズが流行った時代があった。

いろいろ悩ましい選択を迫られ、どちらを選ぶか真剣に選んで楽しんだ。

なかでも、「食べるなら、ウン〇味のカレーか、カレー味のウン〇か」の選択は、意見が分かれて面白かった。

いまでも、新しい究極の選択問題がひらめくと、家族に質問して密かに楽しんでいる。

究極の選択で、忘れられない思い出がある。

昔、職場の後輩が私に言った。

「どんなに仕事が辛くても、死ぬよりかはマシですよ？」

「私なんて、殺されるよりかはマシだと思って働いてるよ。」

死ぬのはサ、病気や事故で死んでしまうことだってあるからね。

でも、殺されるのは、無念すぎるでしょ。だから、殺されるよりかはマシだってね。」

何をそんなに耐えて頑張っていたのか。

そこまで我慢することは、なかっただろうに…。

いま思えば自虐的すぎるけど、その時は必死だった。

恐ろしい究極の選択を自分に課すことで、何とか乗り越えた時代があった。

究極の選択にまつわる思い出がもう一つある。

北京に行ったときのこと。万里の長城を訪れた。気が遠くなりそうな城壁が延々とどこまでも続いている。もちろん早々に途中で引き返し、急な坂道を転がりそうになりながら降りてきた。本当に急こう配で怖かった。もともと道ではなく壁だったのだから仕方ない。

万里の長城も刺激的だったけど、私にとっての驚きはやはりトイレだった。

今はもうだいぶ改善されたのだろうけど、ドアの無いトイレに遭遇したのだ。

和式の便器が横に並んでいて間仕切りが付いているだけだ。

隣りとの仕切りはあるけれど、ドアが付いていない。これには驚いた。

トイレを待っている人達に用を足している姿を見られてしまうのではないか。

順番に、見る側が見られる側になる。恥ずかしいとか言っている場合ではない。トイレがあるだけまだマシか。私が出合ったトイレは間仕切りがあったが、仕切りすらないトイレもあったらしい。

その時、究極の選択が浮かんだ。

もし、壁が一つしかつけれないとしたら、どちら側につけるか。

間仕切りか、ドアか。

用を足している者同士が目を合わせてしまう気まずさと、用を足している者が待っている者に見られてしまう恥ずかしさと、どちらを選ぶのか。

私は前者を選ぶだろう。

羞恥心より連帯感だと、そのとき切に思った。

私の中のコップの水

コップの中に半分だけ入っている水。

これを見て、もう半分しかないと嘆くか、まだ半分もあると喜ぶか。

同じ水の量でも、見る人によって感じ方は違う。

悲観的になるのか、楽観するのか。

学生時代に学んだことを最近ふと思い出している。

このコップの水問題、当時の自分にはピンと来ず、そんなの当たり前じゃないかぐらいに思っていた。

けれど、この問題は深いことがわかった。

私の中に、半分の水を見て、嘆き悲しむ自分と、小躍りして喜ぶ自分が両方いるからだ。

半分は無いが、半分は有る。有るのも無いのも事実。

だが、解釈のしかたは自由だ。

無いことを憂うのか、有ることに感謝するのか。

コップの水は、人生のあらゆる物ごとに置き換えて考えられる。

お金。

年齢。

健康。

若さ。

……。

例えば、人生をコップの水で表したら、仮に寿命が百年だとしても、私の残りの水はかなり少ない。

だが、同じ水の量でも、そのときどきで、感じ方が違って来るから不思議だ。

嗚呼、もうこれしかないのだと感傷的になる時があれば、

まだまだ、こんなにあるんだと妙にヤル気が湧いてくる時もある。

この違いはなんだろう。

その時の気分と言ってしまうえばそれまでだが、感情の状態で見方が変わるとしたら面白い。

一人の人間の中でさえそうなのだから、百人いたら百通りの見方があるのかもしれない。

気持ちしだいで見方が変わるのだとしたら、見える世界も一人一人違っているということか。

私の中のコップの水

起こった出来事は一つでも、捉え方によってずいぶん違うものだと感じることは、よくある。

同僚と二人の帰り道。

二人とも、けっこうハードな案件を抱えていた。

私の足取りは当然重たく、頭の中は明日の心配でいっぱいであんなに暗かった。

いっぽうの彼女、

「そうだ！ 今晚はゆっくりお風呂に入って、あったかい紅茶でも飲んで寝ようっと。」と
明るい。

こんな状況なのに何だか幸せそうに見えた。

同じ状況にいてもこんなに違うのはなぜだろう。不思議でたまらなかった。

その時は理解できなかったけれど、今になってわかることがある。

コップの水の見え方も大事だけれど、

水を入れる器の大きさも重要だと…。

あの時の自分は、コップの水が今にも溢れそうだった。

表面張力の限界点。

溢れてしまって、ようやくコップが小さかったことに気がつく。

そして、やっとひとまわり大きなコップに交換する。

そんな作業を幾度となく繰り返してきた。

そして、これからもコップの水の量に一喜一憂しながら、

新しいコップを探し続けていくに違いない。

シンクロニシティなのか?!

同じ人間と偶然に何度も会ってしまうことが時々ある。

もし、お互いに知っている者同士なら、それは奇遇な出会いと言えるだろう。

だが、知らない者同士が同じ場所に居合わせたとしても、互いに相手のことを認識していなければ、奇跡でも何でもない。

ただの通りすがりの人だ。

実際、私達は一步外に出ると、たくさんの見知らぬ人達とすれ違っている。

けれど、例えば、一方的にどちらかが相手のことを知っている場合の出会いはどうだろう。

果たして、この出会いも奇跡と呼ぶのだろうか？

それは、私の住んでいる地方都市の局アナの女性との出会いだった。

一度目は、地下鉄の中。

彼女は途中の駅から乗ってきて、ちょうど私の目の前に座った。

あっ、テレビに出ているあの人だ！

画面でいつも見ている顔なので、すぐにわかった。

だが、彼女のほうは私のことなど知るわけないから、何ということもない。

たまたま居合わせただけ。

ここまでは、よくある話だ。

それから、何日か後。

仕事の帰り、ふと思いつき、街中の足裏マッサージ店に寄った。

ちょうど足裏マッサージにハマっていた時期だった。

私はどちらかと言うと撫でるようなソフトタッチの施術よりも、悶絶するくらい強烈な刺激が好みだ。

痛がりなわりには、強めの施術でないともう満足できなくなってしまった。

なので、その店は自分的には物足りない手法だったけど、疲れをとるにはちょうど良かった。

たぶん、リンパを優しく流してくれる感じなのだろう。

入店し、受付をしていると、ちょうど施術を終えてロングブーツを履こうとしている女性がいた。

顔よりも、その女性の足に目が行った。

というのも、とても細くてキレイな足だったから。

こんなに細い足をしていても、足裏マッサージをしてもらうのね…。

お疲れ大根足とは大違いだわ~

そんなことを考えながら、何気なく、その女性の顔を見たら、なんとあの女子アナではないか。

当然、彼女は私のことなど覚えていない。

でも、同じ街に住んでたら、こんなこともあるかな…。

ちょっぴりニンマリしてしまった。

だが、その後、たて続けに二回もお会いしたのだ！

シンクロシティなのか?!

三度目は、某デパートに入っている憧れの鞆屋さんだった。

新作の素敵なバッグを見つけたので、いそいそと近寄って見ると、もう一人、そのバッグに見とれている女性がいた。

またしても、彼女だった。

そうか、彼女もこのバッグがお気に入りなんだ…。

私の場合は、ただのウインドウ・ショッピングだったけど。

そして、それから何日も経たずに四度目の再会をした。

古くからある街中の大型書店だった。

私がいつもそうしているように、彼女もまた、本屋さんオススメの新刊の山をなぜか凝視していた。

これが、シンクロシティなのか?!

なんだか、嬉しくなり思わずニヤついてしまった。

だが、よく考えると、偶然というより、

彼女と自分の行動パターンが似ていただけかもしれない。

その時の、趣味嗜好がたまたま一致していただけてとも言える。

もし、意味のある偶然だったら、その後お知り合いになるとか、何かの縁があったと思うが、さすがに五度目はなかった。

それから、しばらくして、地元のテレビで彼女をパッタリと見なくなってしまった。

結婚でもして、テレビ局を辞めたのかなと思っていた。

ところが、偶然、東京のチャンネルの朝の情報番組で三面記事のレポーターをしている姿を見かけた。

けれど、あの時見たような華やかさはもう無かった。

アナウサーからレポーターに転身したのか？

フリーになったということか？ 上京したのだから出世なのかな？

ただ、一方的に見かけただけに、まるで友達の身を案じるかのように妙に気になってしまった。

だが、彼女を見たのはそれが最後だった。

以来、どこのチャンネルでもまったく彼女を見かけなくなった…。

今は、どこで、何をしているのだろう。

元気でいてくれているといいなあ。

ふと思い出しては、彼女の幸せを勝手に祈ってしまうのだ。

墓が燃える!?

「人は思い込みの激しい生き物だからね。」

「本当に、貴方は思い込みが激しいのだから…。」

と、つい相手を責めてしまうことがあるが、

実は、自分の思い込みも相当激しいことを思い知ることがある。

日常での「言った・言わない」問題、「聞いた・聞いてないよ」問題はよくある。

我が家でも、夫婦や親子間で、この問題はよく勃発している。

そして、最後は「こう言ったと思ったから」、「そう聞いたと思ったから」論になり、

最終的に、どちらかの思い違いが発覚する結末になることが多い。

だが、どんなに、こちら側が絶対的な自信をもって自分の正しさを証明しても、

相手の「だってそう思ったんだもん！」の、返しには到底敵わない。

真実是一个の筈なのに…。

どうしても、合点のいかない私。

そして、最後のとどめは、

「そんなこと、どうだっていいでしょ？」

「・・・」

世の中の、ちっちゃな理不尽さを味わう瞬間だ。

だが、救われるのは、およそ、どうでも良いことで、漫才のように、言った言わないコントを毎度繰り返しては楽しんでいることだ。

そう考えると、人生は本当にコントみたいだと頷ける。

互いに狂言を吐いて、日々、茶番劇を演じているのかもしれない。

さて、私の思い込み史上、最も上位に挙げられるのが「墓が燃える」事件だ。

墓が燃える!?

それは夏真っ盛りのこと。

日の出が早く、三時を過ぎるともう外が白々と明けてくる時期だった。

うちのマンションは高層でもなく広くもないのだけれど、唯一、朝は東の窓からご来光が拝められ、夕方は西のベランダから夕日が眺められることが自慢だ。

とくに、ベランダからようど見える山肌の色の微妙な変化に季節の移り変わりを感じるのが歎びだった。

だが、そんなお気に入りだった西側に、突然、高層マンションが建設されてからは、私のささやかな喜びも半減してしまった。

けれど、山の眺望は辛うじて左半分だけは残っているので、朝な夕な、お山さんを眺めるのが至福の時だ。

さて、話は戻る。

その日は、妙に朝早く目覚めることができた。晴天の朝はとくに目覚めが良い。

気分よく東窓からご来光を仰いでから、いつものように西の景色を見に行っただ。

すると、山の中腹あたりが、真っ赤に光り輝いているではないか！

赤色にも色々あるが、真紅というか、およそこれまで見たことのないような赤色だった。

朱色のようなバラ色のような…もの凄く綺麗な色だ。燃えるような赤。

というか燃えている？

けれど、炎には見えなかった。火の玉？ はたまた未確認飛行物体？

とにかく、真っ赤に光っているのは確かだ。

急いで、双眼鏡を取り出し、光り輝くその箇所を覗いて見た。

なんと、そこは墓地だった。

エーッ？ 墓が燃えているのか?!

だが、双眼鏡で見ても、正体はよくわからず。時計を見るとまだ5時前だった。

そうこうしていると、その赤色は自然に消えていった。

でも不思議すぎる！ 絶対なにかあるに違いない！

かくして、KABOちゃん探検隊が出動することとなったのだ!?

墓が燃える!?

あれは、いったい何だったのだろう…？

真相をどうしても解明したい私。

「たいへんだよ！ お墓が燃えてたから！！」

さっそく、夫に、謎の現象の一部始終について熱く語った。

半信半疑で怪しまれるかと思いきや、興味をもって話を聞いてくれたのは意外だった。

そして、あくる日の同じ時刻、興味津々の夫と共に検証を開始した。

その日も天気は晴れだった。

双眼鏡でじっくり観察する夫。

「ホント赤いな！ 何だろうね〜？」

淡々としたリアクションだったけど、確かな同意を得たことが嬉しかった。

なんたって、ふだんから、目に見えないものとか不可思議なものは大嫌い、非科学的なことは絶対に信じない夫だったから。

ヤッター!!

これで、夫も謎の現象発見の仲間入りだー！

ワクワクしているうちに、その赤い光は、またまた自然に消えていった…。

これは、もう確かめに行くしかないでしょ？

珍しく、意気投合した私達。

ちょうど休日だったこともあり、ドライブがてら、さっそく現地に向かった。

墓が燃える!?

そこは、いつも私が眺めている山の中腹にある墓地だった。

古くからある場所だったが、その墓地には縁が無かったので訪れるのは初めてだった。

実際に歩いてみると、山沿いに墓が連なり、急こう配なので上の方まで行くにはけっこう大変だ。

途中いろいろなお墓が目にとまった。

綺麗に掃除され、花が供えられているお墓もあれば、草が茫々、長年誰も訪れていないようなお墓など様々だ。

世代交代やいろいろな事情で墓守が絶えていくお墓もあるのだろう…。

さて、私達がだいたい目星をつけていた、ここら辺だと推測する場所に近づいた。

ところが、あたりに燃えたような形跡や異変はどこにもなく、立派なお墓が整然と並んでいるだけだ。

やはり墓は燃えていなかった…。

と思ったら、キラリと光るものが視界に入った。

墓石に使われている御影石がピカピカに光って眩しい。

「これだ！！」

ピンときた。

たぶん、この石が朝日に照らされ、我が家から見た時にちょうど赤く光って見えたに違いない！

その一帯のお墓はピカピカに磨かれた御影石でできていた。

東に向かって立っている墓石群が真夏の強烈な朝焼けに反射し、赤く燃えて見えたのだ

ろう。

結局、超常現象でも何でもなかったのだ。

けれど、今回は「そもそも石が燃えるわけないだろ？」と言う夫からの野暮な突っ込みは一言も無かった…。

ちょっぴりのガッカリ感と不思議な安堵感に包まれながら、帰途についた。

試しに、曇り空の同じ時刻に観察したけれど、赤い現象は見られなかった。

そして、秋になり、太陽の出てくる方角の変化と共に赤い光の勢いが弱まっていくこともわかった。

けれども、昔の人が、こんなふうにならぬ場所から赤く光って見えることを想定して、お墓が建てられたとしたら何だか凄い。

ロマンチックにさえ思える。

今でも、天気の良い真夏の早朝は燃えるような赤い光たちを見ることができる。

偶然の自然現象が織りなす光のファンタジー。

早起きのご褒美としては、あまりにも贅沢な瞬間だ。

お月さま、こんばんは

「お嬢さん、下ばかり向いて歩いてないで、空を見上げてごらん。

月がとっても綺麗だから。」

見知らぬお婆さんに、通りすがり、そんな声をかけられた。

新人時代の頃、たしか、友達との飲み会に向かう道だった。

考え事でもしていたのか、それとも道にお金でも落ちていないか探索してたのか、

あの頃の自分は、確かにいつも下を見て歩いていた。

ふいに話しかけられて驚いたけど、お婆さんはニコニコ笑っていた。

夜のお散歩中か、ちょっとお酒でも入っていたのか、その女性にご機嫌だった。

そして、空を見上げると、本当に月がまん丸で綺麗だった。

お婆さんが、その時歌ってたわけではないけれど、

「月がとってもあおいから、遠回りして帰ろう～」

という歌のフレーズが頭に浮かんだ。

今まで、月が蒼いと感じたことはなかったけど、

まさしく青白く光っていた。

若かった私は、気の利いた挨拶も何もできなかったけど、

お婆さんは、そのまま楽しそうに夜道に消えて行った。

見も知らないお婆さんに、元気をもらった夜だった。

それからは、また蒼い月が見たくて、

ときどき夜空を見上げるようになった。

「お月さま、こんばんは」

私は、今日も元気です。

道きく人、きかれる人

ボーっとして見えるのか、暇な人だと思われるのか、道をきかれることが多い。

たいていは年配者だ。

たまたま近所に大きな病院があり、地下鉄から上がって出てくる人に、その病院の場所を尋ねられることが多い。

目と鼻の先にある病院だが、これが意外とわかりにくいのだ。

口で説明しても、何だかピンと来ていない人には、

時々、一緒に病院の見える所まで送ってあげることがある。

たいそう恐縮されるけど、口で言うより連れて行ってあげたほうが手っ取り早いのだ。

やはり自分は暇人なのか。

親切とお節介の境目。

感じ方は人それぞれだけど、自分も助けられたことは多々ある。

昔、ソウルで、ホテルに帰る途中、道に迷い途方に暮れていたとき。

中年の女性が近寄ってきて、言葉はわからないけれど、

いったいどうした？ というニュアンスで声をかけられた。

私が困って日本語の地図を見せると、彼女はアイスクャンデー舐め舐め、

突然、私の腕をムギュッと掴んで、

親切に、目的のホテルの玄関先まで連れて行ってくれた。

少々強引な感じはしたけれど、とても助かった。

私のたどたどしいお礼の言葉を聞き、

ぜんぜんたいしたことないよ (笑) という素振りで、

手にしたアイスクャンデーを美味しそうに舐めながら去って行った姿が今でも忘れられない。

そう言えば、地下鉄の中でも道路でも、

ただ地図を広げて見ているだけで、

どうしたんだ？ いったい何を困っているんだ？ という感じで

老若男女から声をかけられることが多かった。

ちょっとお節介すぎる親切さに驚いたけど、鬱陶しい感じはしなかった。

情け深い人が多いのか、

それとも、いろいろありはしても、通りすがりの旅人には優しいということか。

なおも道きく人、きかれる人

近所で道をきかれることはよくあるが、海外に行っても道をきかれることがある。

「真実の口はどこ？」

白人カップルに訊かれた時、

こっちが訊きたいくらいなんですけどー！ と思ったけど

有名な観光地は人種の坩堝だから、誰が誰に道を尋ねよう関係ない。

バックパッカーも謎のウエストポーチ族も旅人の目的地はみな同じ場所だから。

そして、どう見てもアジア人な自分。

「真実の口ですか？ 私もこれから行こうとしていました。でも私も道がよくわからないんです…。」

などと流暢に答えられたら、どんなにスマートだろうけど、

ブロークンなイングリッシュで返す言葉は、たいてい一言

「アイ・ドント・ノー」のみだった…。

おおかたは「オーケー (笑)」と軽く微笑まれて完結だ。

ご期待に沿いたいと言う、私の小さな虚栄心は満たされないけど、たいていは後味が良かった。

だが、一度だけ、

「アイ・ドント・ノー」だけでは済まされない、不思議な人に出会ったことがある。

それは、台北駅の構内だった。

なおも道きく人、きかれる人

台湾にある淡水という街に行きたくて、私は台北駅で切符を買おうとしていた。

観光スポットとして、友人から淡水をオススメされていたこともあったが、

私の目的は超ロングサイズのソフトクリームを食べることもあった。

実際に注文してみたが、高さが本当に50 cm くらいもあって驚いた。

世界一長いであろうソフトクリームは、食べた先からダラダラと溶けだし、

周りの観光客からはジロジロ見られるので、けっこう大変な思いをしてしまった。

あとから考えると、あれはカップルが二人で食べるものだったのかもしれない。

河口に沿った街は、台湾と西洋がミックスされたエキゾチックな雰囲気だった。

干潟の周りをブラブラ歩いていたら、日本のランドセルを背負ったおじさんを見かけた。

大人もランドセルを使っているんだ…。

はじめて訪れた場所だけど、どこか懐かしい香りのする街だった。

さて話は戻る。

そんな淡水へ行くために、駅でMRTという乗り物の切符を買おうとしていた時だった。

私が路線図をじっと見ていると、雑踏の中、一人の男性が声をかけてきた。

中国語で何か言ってくるけど、もちろんわからない。

だけど駄だし、たぶん道か何かを尋ねているのだろう。

私が台湾人に見えたのか？

とりあえず「アイ・ドント・ノー」と言ってみた。

ふつうは、そこで、諦めてくれるだろう。

ところがその男性、引き下がらない。

こちらが、「わからない」とアピールしても

その青年は必死に、何度も話しかけてきた。

どこか地方からでも出てきた人なのだろうか。

何かに困っているということは、私にもわかった。

ごめんなさいね。私も遠いところからやってきて、何もわからないの…。

自分も精いっぱい困り顔でそんなリアクションを試してみた。

すると、その人はやっと諦めて去って行った。

彼は無事に目的地に行けたのだろうか。

それにしても、世の中には、いろいろな人がいるものだ。

むろん自分も、その一人だったりするわけだけど。

サンマと火事場の馬鹿力

秋刀魚の美味しい季節だ。

昔、サンマは庶民の魚の代表だったけれど、今は違う。

この頃、スーパーで見かけるサンマはびっくりするほど高くて、まるで高級魚みたいだ。

百円玉一枚でサンマが2匹買えた時代が懐かしい。

それでも、脂の乗ったサンマは食欲をそそるし、やはり、たまには食べたくなる。

魚料理の苦手な自分でも、サンマくらいなら焼ける。

生臭くなく、美味しく焼き上げるコツは色々あるようだが、とりあえずグリルで焼き始める。

皮に焦げ目が付きだし、ジュージューといい匂いがしてくるとあと一息だ。

換気扇を回しても部屋中が煙っぽくなってしまいうけど、それもまた味わい深い。

子どもの頃、サンマが丸焦げにならないよう、よく見張り番をさせられたものだ。

秋の夕暮れ、サンマの焼ける匂いがどこかしらの家からしてきたものだった。

さて、自分的には完璧に焼きあがったサンマ。

最後の難関は、この傑作をどう皿に移動させるかだ。だが、皿に盛りつける時に、どうしても、グシャッとなってしまう。

道具がいけないのか。ただ無器用なだけか。トングか何かでササッと挟んでしまえば簡単なのかもしれない。だけど、やはり、昔、母が行っていたように、自分も菜箸でヒョイと掴んで皿に乗せてみたい。

一匹くらいは無傷で皿に乗せられるけど、

私が盛り付けると、たいていは残念なサンマの塩焼きになることが多い。何がいけないのか？

ある日、ふと閃いた。これはテクニックではない。

気合だ！

絶対に成功させるという強い思い。

1%の疑いもなく、必ず、私はサンマを完璧に皿に移動させることができる！ I can do it!!

コツは、箸を持つ指先より、むしろお腹の丹田あたりに「はっ！」と力を入れることだ。

いざ、全神経をサンマに集中させて、やってみる。

すると、どうだろう。見事サンマは無傷で全員、皿に着地した！

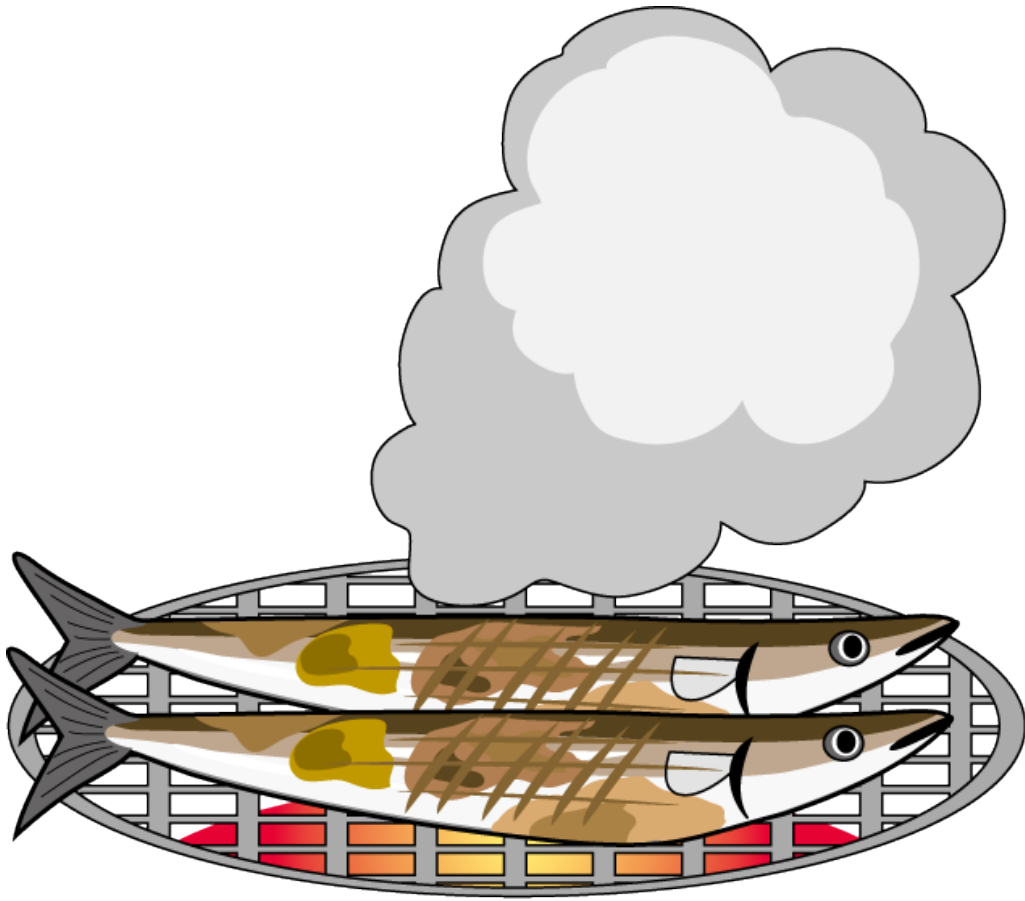
絶対にできると決めたら、できるものだ。

これぞ火事場の馬鹿力。

サンマが教えてくれた、潜在能力の引き出し方だ。

人間の潜在能力は10%しか使われていないらしい。

もしかしたら、自分はまだ1%も使っていないのかもしれないぞ！などと妙に元気が出てくる。



今では、この方法でサンマの盛り付けは完璧だ。

願わくば、サンマの救出以外でも、私の潜在能力を引き出したいものだが!?

知らぬが仏?!

旅行に行って、道に迷うことは、しょっちゅうだ。

旅先で路頭に迷うことは私の場合、珍しくない。

それでも、おおかたは目的地に無事に辿り着ける。

たいていは、何とかなるものだ。

だが、移動中に、一度だけ恐ろしい体験をしたことがある。

友人と韓国に行ったときのこと。

私達は当時ハマっていた韓流スターが経営しているカフェにどうしても行きたかった。

地図を片手に右往左往、現地の若者たちに尋ねてみるものの誰もわからない。

今回こそ、迷宮入りか…。

諦めかけてたその時、一人のおじさんが現れた。

地図を見せると、そのおじさんは

ああ、知ってるよと言わんばかりに私達を誘導した。

救世主現る！ 何の疑いもなく、私達はそのおじさんの後をついて行ってしまった。

今思えば、地図は日本語だったし、そのおじさんがあの店を知っているとは到底考えられないのだが。

それでも、必死な私達は、魔法にかかったかのようにおじさんに導かれてしまった…。

おじさんの後をついてしばらく歩くと、タクシーが止まっていた。

すると、おじさんは、私達にタクシーに乗れと言うではないか！

なにっ？ 顔を見合す私達。

おじさんは客引きで、私達をタクシーに誘導したかっただけだったのか？

だが、おじさんが先にタクシーの助手席に乗ったのだ。

落ち着いて考えれば、この時点で怪しいと思う筈だが。

異国の魔法にかかった私達ときたら…。

客引きではない？ やはり、おじさんは、あの店を知っているのね？

なんて親切な人だろう、タクシーで連れて行ってくれるとは！

と都合の良い解釈をしてしまった。

そして、のこのことそのタクシーに乗ってしまったのだ。

後から聞いた話だが、その時、友人は、いつでも逃げられるように車のドアノブを握っていたそうだ。私は私で、ポッタくられるのではないかという不安はあったものの、自分たちが大胆なことをしているという自覚はまったく無かった。

ふだん、知らない人について行ってはいけないヨと言っておきながら、

大の大人が二人、知らない外国人について行ってしまったのだ・・・。

知らぬが仏?!

いとも簡単にタクシーに乗せられてしまった私達。

いったい、何処へ連れて行かれるのだろうか？

その時、何故か、中学生の時に友達から聞いた話を思い出した。

香港のお土産屋さんに行き、店員に案内されて試着室に入ると、突然、床が抜け地下室に落とされ、怖いおじさん達に拉致されてしまった女の子がいるんだ、ってお父さんが言っていたと・・・。

嘘か誠か、作り話かはわからないけど、外国って怖いところなんだーって驚いたことを思い出した。

もしかして…??

最悪の状況が一瞬アタマをよぎったものの、友人と一緒にということもあり、私の危機意識は薄かった。

そして、こんな時こそ、「見せ金」を用意していたら、これがありっけのお金です！ってお金を渡し、二人してチャーリーズエンジェルになりきり、でんぐり返しで車から脱出劇もありか…などと不謹慎にも妄想していた。

だが、そんな脱出作戦はむろん必要なかった。

タクシーは、あっけなくすぐに止まったのだ。

おじさんは、私達に、あっさり、着いたヨと言った。

実際、車に乗っていたのは、ほんの数分だったと思う。

降りると、そこは、まったく知らない土地の駅だった。

えーっ？ いったい、ここは何処？

地図の読めない私にも、お目当てのカフェから、ますます遠ざかってしまったことはわかった。

おじさんは、何を思って此処に連れてきたのだろうか？

だけど、タクシーに乗ってしまったのは私達だから、タクシー代を払おうとすると、何とおじさんは、いらない！ と言うのだ。

半ば強引に乗せられて知らない町に連れて来られてしまったわけだけれど、さすがに無賃乗車は気がひける。

だが、おじさんは自分の財布からお金を出し、タクシーの運転手に運賃を払って自らも降りた。

そして、私達のお礼の言葉を聞くか聞かないかのうちに、サッサと歩き出した。

私達が、覚えたてのアニョハセヨ〜と叫ぶのを背中で聞きながら、

おじさんは「あばよ」と言わんばかりに後向きで手を振り、

あっという間に駅の雑踏の中に消えて行ってしまった。

結局、私達は目的のカフェに行くことはできなかった。

あの時は、怖かったよね…。

でも、あのおじさんは何だったのだろうね。

今でも、思い出すたび友人と盛り上がってしまう。

はたして地獄で仏だったのか？ それとも、知らぬが仏なのか…。



それでも、やっぱり、悪意よりも善意を信じていたい。

旅は情け、人は心。

味わいたくて、懲りずにまた旅に出る。

にゃんこ先生の教え

久しぶりに、実家の和室の布団に一人で寝た。

すると朝方、モフモフの毛が私の顔を横切るのを感じた。

すぐに猫だとわかった。

なぜならゴロゴロと喉を鳴らす声と一緒に、フワフワとした猫のお腹の毛が私の鼻先を優しくかすめたから。懐かしいその感触。

だが、猫はずいぶん前に亡くなっていた。

幼い頃から、私が猫をよく拾ってきては実家で飼ってもらった。

捨て猫から野良猫まで、いろいろな猫たちとの出会いがあった。

この頃は、野良猫の姿もすっかり見られなくなったが、昔は猫によく出くわしたものだだった。

さて、家で飼っていた猫は、たいていがツンデレだった。

餌の時だけ、たいへん友好的でスリスリ寄ってきたけれど、あとは知らんぷり。

容易には懐かず、抱っこも嫌いな猫が多かった。

遊んでもらおうと、こちらから仕掛けようものなら、ご機嫌斜めだと毎度「シャーッ」と威嚇された。

どこまでも気高く、気まぐれでワイルドだった。

それでも、そんな猫が大好きだった。

引っ搔かれても猫パンチされても、懲りずに猫の後をしつこく追いかけて回したものだだった。

私は、猫と一緒に寝たくて、毎晩、自分の布団に連れてきた。

けれど、お猫サマは「とんでもないぜ、百年早いヨ！」と言わんばかりに、いつも飛んで居間に逃げていった。

ところが、なぜか朝方になると、ゴロゴロいって私の枕元から布団の中に入って来た。

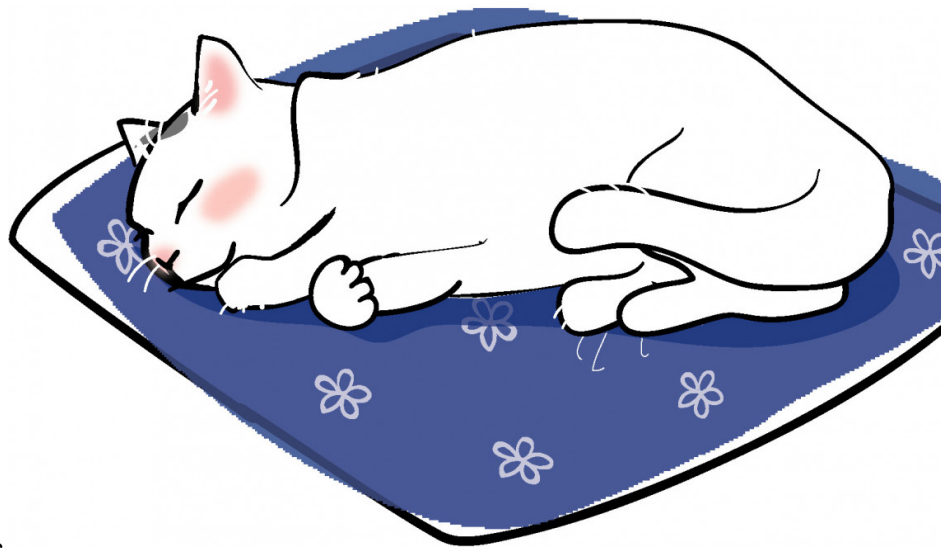
その感触の柔らかさと温かさがたまらなく愛しく幸せだった。

そんな夢み心地の感触が久しぶりに蘇った。

歴代の猫が会いに来てくれたのか、それとも、私がお会いに行ったのか。どちらでもかまわれないが、今でも、とんでもなく落ち込むと夢の中に猫が登場する。

にゃんこ先生が、私の懐に抱かれ、人生を説いているのだ。

私は、いなかっぺ大将さながら「どぼじで、どぼじで」と



大粒の涙こそこぼしはしないが、

にゃんこ先生のお言葉に心動かされ目が覚めるのであった。

にゃんこ先生の教え

実際、猫は幸せだけでなく、大事なことを私に教えてくれた。

にゃんこ先生からの教えで、もっとも勉強になったのが、

「今を楽しめ！」だった。

たとえば、猫に餌をあげるとき。

猫は喜び勇んで、餌場に駆け寄ってくる。どんなに遠くに居ても、待ってましたとばかりにやって来る。

ある日、私は餌場に突進する猫に、あえて猫じゃらしで誘惑してみた。

するとどうだろう。うちの猫は、餌場へ行くことも忘れ、ひとしきり猫じゃらしと戯れた。

こんなことは普通なのかもしれない。

だが、そのとき思った。はたして、猫は食べる目的を忘れてしまったのか？

いや、違う。にゃんこ先生は、「今」をひたすら楽しんだのだ、と。

今この瞬間に、目の前で起こったことをただ受け入れて楽しむ。

そして、味わい尽くしたら、次のステージに行く…。

流れに任せる。

私をもっとも苦手とする生き方だ。

目の前に猫じゃらしが出現しようと横やりが入ろうと、私なら、脇目も振らず何が何でも餌場に向かう。

途中で寄り道してしまうなんて、とんでもない。だって、私の目的は餌を食べに行くことだから…。

だから、今を楽しめない。

たとえば散歩するのも苦手だ。買い物や用事足しで外出はしても、目的なくブラブラはできない。自分的に何かしら動機付けがないと動かない。意味のない行動、無目的な動きが、いつのまにかできなくなってしまった。

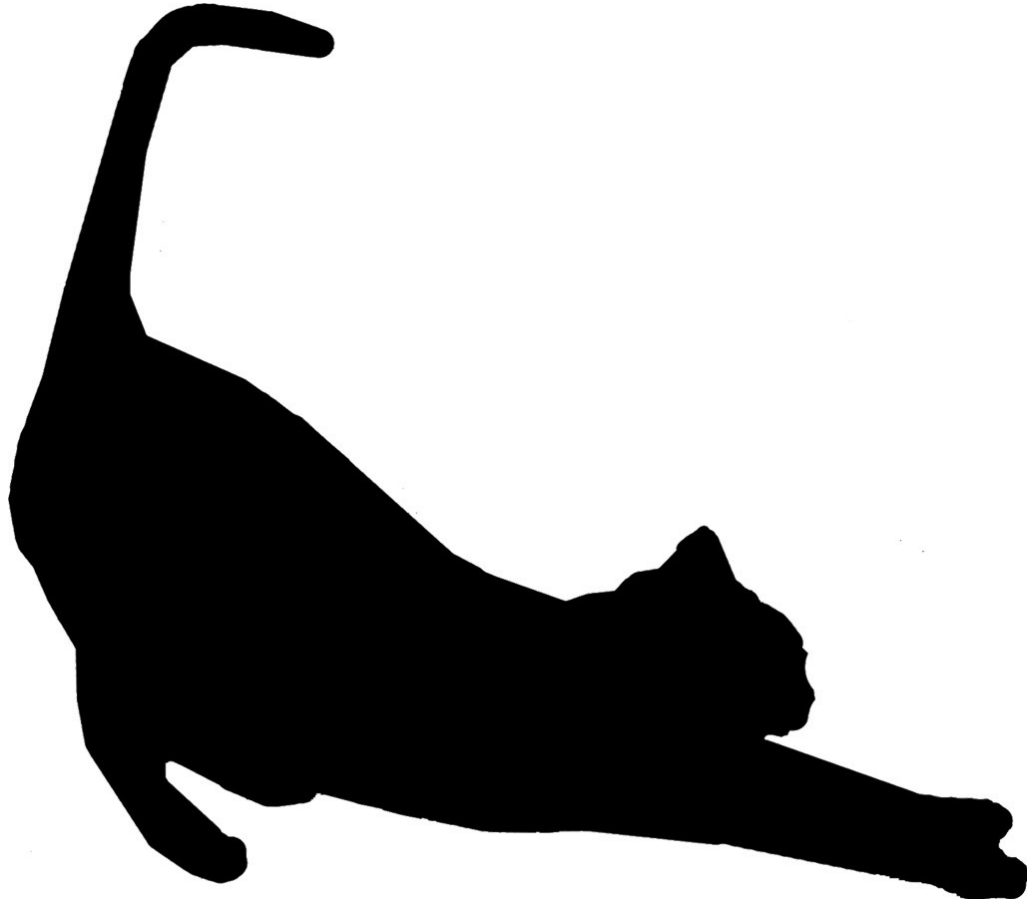
ふと、つまらない生き方だと思った。

信号が赤なら赤なりに、雨が降れば雨なりに、風邪ひいたならそれなりに、

そのときの状況を味わい尽くせばいいのだろう・・・。

でも、私にとって、余計な猫じゃらし干渉は目的を逸脱させるだけの無意味な邪魔者だった。

だが、最大の抵抗勢力は、かくもガンコな自分自身だったことに気づく。



そして、私は偉大なるにゃんこ先生のこの教えに、

ただただ平伏すのだった。

にゃんこ先生の教え

「今」を生きてる猫にまつわる体験で、切なかつた思い出がある。

ある日、夫と回転寿司屋に入ろうとしたときのこと。

突然、大雨が降ってきた。

車から降りた私達は、辛うじて雨に打たれずお店に入ることができた。

そして、無事に席に着いたら、一匹の猫もまた雨から逃れ、

私達の後からタイミングよく自動ドアを通過して店内に入ってきた。

ラッキーにも雨宿りできた猫は、まるでヤレ、ヤレとでも言うかのように、

ホッとして、店の中で雨に濡れた自分の毛を一心に舐めていた。

良かったね、猫ちゃん！

でも、ここは飲食店、このあとどうなるのだろう…？

と心配していたら、案の定、従業員は猫をヒョイと両手で捕まえて、

大雨降る外に出してしまった。

そのときの猫の姿が今でも忘れられない。

まるで、アレっ？ という表情で、

天国からどしゃ降りの世界に瞬間移動させられてしまった感じだった。

可愛そうに…。

だけど、私達はどうすることもできなかった。

店側も、回転寿司屋の中に猫が居ては困るだろうし、いたしたかなかったのだろう。

そのあと、猫はまたどこかで雨宿りしたに違いないけれど、

一瞬の儚さと切なさが胸に込み上げ、

やるせない思いで私は 100 円皿を黙々と積み上げたのだった。

ところで、私は、「今」この瞬間を楽しんで生きているか。



いえいえ、にゃんこ先生の足元にも及ばないです。

教授のお眼鏡にかなう日は、まだまだ遠いようだ。

タウンズビル回想

かれこれ10年前にさかのぼる。

理由あって、私はオーストラリアに一月ほど滞在していた。

そこは、タウンズビルという都市にあるアパートみたいなホテルだった。

ケアンズは知っていたけれど、タウンズビルのことは全く知らなかった。

当初は、なんと小さな町に来てしまったのだろう…と思っていたけど、

実はケアンズよりも人口がずっと多い大きな港湾都市だったことを後で知った。

けれど、たった一人での逗留はたいへん心細くて不安だった。

ケアンズからプロペラ機に乗り、タクシーで何とかホテルに辿り着いた頃には、もう日が沈んでいた。

余談だが、タクシー乗り場で待っていると、私の前に並んでいた白人の女性に声をかけられた。

何処まで行くのか尋ねられたと察した私は、ホテルの名前の書いたメモをその女性に見せた。

すると、彼女はニッコリ笑い早口の英語で何か言ってきた。

ニュアンスで「相乗り」の誘いだとわかった。

相乗りさせられて、結果、彼女だけが得するパターン？ が

咄嗟に浮かんできたけど、思い切って相乗りさせてもらうことにした。

だが、彼女は、いい人だった。

その女性は、私よりも先に降り、自分の降りた地点のタクシー運賃を払ってくれた。

そして、運転手は、彼女が降りた地点でメーターを再びゼロにリセットしたのだ。

それから間もなく自分もタクシーを降りた。

結局、私が払った運賃は少額で済んだ。

初めての相乗り体験だったが、最初にその女性を疑ってしまった自分を少しだけ恥じた。

何より、今にも泣きそうにポツネンとしていた日本人の姿が、

地元の人には不憫に映っていたのだろう。

実際、タウンズビルでは色々な人達にお世話になることとなった…。

さて、海岸からは大分離れた場所に位置する2階建てのそのホテルは、

建物がそこだけジャングルのように草木に囲まれていた。

真っ暗い中、その建物の軒下を部屋に向かって歩いていると、

私の目の前を次々にピョンピョンと跳ねるものがいた。

よく見ると大きなカエルだった。うわー、デカイ！

今まで見たことのない巨大カエルのとの遭遇で、

不安な気持ちが逆に少し和らいだ。

ところが、そのあと、人生初の、は虫類たちとのご対面で、

私は超パニックになってしまうのだった。

アイ アム ゲッコー！

そのホテルの部屋は、アパートのように屋外から直接、室内に入るタイプだった。

暗がりの中の巨大カエルには驚いたけど、無事、部屋に入り、まずはホッとした。

けっして広くはないけれど、一人でしばらく滞在するには十分な空間だった。

心細くはあったが、とりあえず何とかここで過ごすしかない。

いろいろな事情があり、こちらに辿り着くことになったわけだが、

その経緯については、いつかまた機会があればということで…。

それにしても、その日はとても疲れた。

緊張はまだ続いていたけれど、部屋に着いたとたん、睡魔がドッと襲ってきた。

まずは、ゆっくり眠ろう。

と何気なく部屋の白い壁を見ていたら、何かがササッと移動した。

近眼の自分にもそれが生き物だということがすぐわかった。

エッ、何？ 咄嗟に壁に近寄って確かめた。

すると、その生き物らしき者は、気配を感じたかのようにピタッと静止した。

それは、緑っぽい半透明で、5センチくらいの長さだった。

よく見ると、手足に吸盤が付いている。

これは、ヤモリ？ それともイモリか？ まさかトカゲなのか？

はじめて見た生き物にビックリ仰天した私。

きゃーッ、この生き物と一緒に寝るなんて絶対にイヤだ！

とりあえず、フロントに電話しよう。

従業員に言って、今すぐ、この生き物を捕まえてもらわねば！

だが、英語が出てこない。

なんて言えばいいのだろうか？

ヤモリか？ イモリか？

たしか、ヤモリは、は虫類で、イモリは両生類だと習ったような気がする。

でも、その違いなんてわからない。

慌てつつも、持参した電子辞書で調べた。

やはり、ヤモリなのか？

和英辞典で調べたら、ヤモリは「ゲッコー」と書いてあった。

よし！

とにかくフロントに電話をした。

どうしましたか？

フレンドリーな男性がすぐに電話に出てくれた。

私は、泣きそうな声で、助けを求めた。

そして、思わず、

「アイ アム ゲッコー！」と言ってしまったのだった！！

キモかわいい守り神

フレンドリーなオージーは、狼狽える私の声を聞き、笑って何か言っていた。

エーッ？ この一大事になぜ笑っているのだろうか？ とは思ったけど、

すぐに助けに来てくれるに違いないことを信じ、じっと部屋で待っていた。

ところが、いつまで経ってもホテルの従業員は来てくれない。

しばらく、ゲッコーと私のにらめっこが続いた。

だが、よく見ると、このヤモリ、けっこうユニークな顔をしているではないか。

キモかわいいとはこのことか？

と思ったら、なんと、ヤモリ君はあろうことにも

備え付けの棚にしまってあった私の毛布の中に、

ヒョロヒョロっと潜り込んでしまったではないか！

ギョエ〜！！

結局、オージーは朝まで誰も来てくれなかった。

私は、ヤモリがベッドの中に入ってくる恐怖に怯えながら一晩を明かした。

その後、部屋の中でも外でも、そこらじゅうでヤモリを発見した。

調べていくうちに、ヤモリは害虫を食べてくれる良い生き物だということを知った。

どうやら、赤アリの発生するこの地域では、ヤモリは大事にされているらしい。

なので、壁にヤモリは、此处では当たり前の光景らしかった。

雪国暮らしの自分にはかなり刺激的だったけど…。

あの日、気が動転して「アイ アム ゲッコー！」と助けを求めても、

笑って相手にされなかった理由が、暮らすにつれだんだんとわかっていった。

そして、毎晩、私はこのキモかわいい神様に見守られながら、眠りについたのであった。

いろいろな意味で、忘れられないタウンズビル滞在となった。

ベトナムで肝だめし

一度だけベトナムに行ったことがある。

バイクの4人乗りもビックリ仰天だったけれど、

いちばん怖かったのは、道路に信号機がついていないことだった。

発展途上の国なら珍しいことではないのかもしれないが、

私の訪れた地域では、どこを探しても見当たらなかった。

もちろん横断歩道みたいなものもない。

道路は、車やバイクが縦横無尽に走っている。

それも、けっこうなスピードで行き交っているのだ。

まるで巨大なロータリー状態。

交通整理をする人がいるわけでもないのに、よく事故にならないものだ。

そして、驚きだったのは、その車の間を縫って、

地元の人達が悠々と歩いていたことだ。

思わず、ヒョエ～、怖～い、轢かれる～！ と叫んでしまったが、

不思議とみな無事に渡っている。

さて、私の番。

行きたい店に行くためには、

どうしても、この恐怖の道路を渡らねばならない。

う～、恐ろしすぎる…。

誰かの後を付いて一緒に歩けば良いのだが、

超ビビリな自分は、なかなかタイミングがつかめない。

どうする？ あきらめて退散するか？

だけど、ここで渡らなかったら、私はずっと何処へも行けない。

せっかくベトナムまで来て、車に轢かれるのが怖いからといって、

同じ場所を行ったり来たりで終わるのは残念すぎる。

昔、車の運転の苦手な友達が、

右折が苦手だからといって、常に左折のみで運転し、

目と鼻の先にある自宅までいつも大回りをして帰ると聞いて、

笑ってしまったけど、左折のできる彼女のほうが、

私よりずっと勇気がある…。

ベトナムで肝だめし

勇気？

というか、そもそも轢かれると決めつけることはないだろう。

それに、車の運転手だって、人間を轢いてしまうのは嫌だろうし。

へんにビビって小走りしたりするから余計に危ないのだ。

そうだ、堂々と渡ればよいのだ！

だって、信号が無いんだもん。

ここで渡らなければ、私は一生、何処へも行けない…。

禅問答のごとく、しばし自分との珍問答が続いた。

エーイ、轢くなら轢いてみろ！

バンジージャンプはしたことないけど、

自分的には、そのくらいの覚悟で、歩き出した。

すると何のことはない、車は普通にスピードを緩めて止まってくれた。

そして、どの車に跳ね飛ばされることもなく、

無事に道路を渡りきることができたのだ。

それにしても、ただ道を渡るだけで、

こんなにも勇気と覚悟が必要だったとは…。

そのあと、凄い欧米の女性を見かけた。

彼女は、ビュンビュンと走って来る車に、

まるで「おどきなさい！ ここは私が通る道よ。」と言わんばかり、

右手で一台ずつストップをかけ、車を止めては歩き止めては歩き渡っていた。

威風堂々、あっぱれだった。

さすがに彼女の真似はできなかったけど、

肝だめし横断体験のおかげで、私も少しだけ度胸がついた気になった。

そうは言っても、肝っ玉は相変わらず小さいが(笑)

古今東西、ウンを踏む女

ベトナムで、もう一つ印象的だったことを思い出した。

交通状況もしかりだが、インフラがまだ整っていないせいか、

道まわりは、けっして衛生的とはいえなかった。

道路脇には、屋台がたくさん並んでいた。

私は本場のフォーが食べたくて、最初に見つけた店に迷わず入った。

すると、お店のお姉さんは、

バケツみたいな桶の汲み水の中で、チャチャッと食器を洗いだした。

ふーむ、水道はないのね。

そして、なんと洗った食器を地面の上に直接ドンと置いたのだ！

なるほど…。さて、どうする？ やっぱり、やめて帰る？

ここでまた自分との珍問答。

結局、ぜんぶ見なかったことにして、私はフォーを味わった。

日本よりも味わい深かったのは、複雑なダシが混ざっていたからか…。

そして、私が食べ終わると、

お姉さんはその食器を再びあの桶の水で洗っていた!?

世界は、やっぱり広い。

それにしても、道を歩いていると、何処からともなくプーンと臭ってくる。

なんだろう、このニオイ。

ドブのような、肥しのような…。

大昔に嗅いだことのある懐かしい臭いだった。

さて、ずっと気になっていたのだが、

道端に大きなカリントウのような物体が、そこかしこに落ちていた。

気を付けて歩いていたので、踏むことはなかったが、

立ち止まってじっくり見てみた。

すると、まぎれもなく、ウンだった！

これは、犬の落とし物か？

それにしても、ずいぶんと大きい。

犬にしては、巨大すぎる。

エーっ？ まさか、人間のものなのか?!

古今東西、ウンを踏む女

道端に落ちている巨大なカリントウ群を見て、

ふと、遠い昔の思い出がよみがえった。

幼少の頃、新しい靴を買ってもらい嬉しくて外に飛び出した私は、

決まってウンを踏んで帰ってきた。

今でも鮮明に覚えている。

あれはピカピカの黒いエナメルの靴だった。

ルンルン歩いていたら、ふいに訪れた「ムニョっ」とした感触。

でも、あれっ？ っと思った時点で、もう遅かった。

昔は野良犬がけっこういたから、たぶん犬の物だったのだろう…。

道端の雑草で靴底をこすって懸命にウンを落とそうとするけど、

いつも完全には、取れずじまいだった。

ほんとうに、ガッカリ…という言葉がピッタリの残念な光景だった。

幼な心に、ウンを踏んでしまったショックで、

かなり落ち込んで家に帰ったっけ…。

そんな経験をなぜか私は何度も繰り返した。

今思えば、かなりドン臭い女の子だったのだろう。

そして、時が過ぎ、ウンを踏むこともいつしか無くなっていった…。

さてベトナムでは、幸い、ウンを踏む悲劇には遭遇しなかったが、

ウンの落とし主が、犬なのか、人間なのかは極めて怪しいと思った…。

ところが、最近、

なんと私は、半世紀ぶりにウンを踏んでしまったのだ！



古今東西、ウンを踏む女

それは、近所の公園だった。

紅葉の時期も終わり、落ち葉がたっぷりと道を覆い、

いつ雪が降ってもおかしくない寒さの日だった。

私は運動不足解消にと思い立ち、夫を誘って、珍しく散歩に出かけた。

けっこう広い公園で、犬を連れて散歩する人々も多かった。

皆、しっかりリードをつけて公園内のコースをマナーよくお散歩している。

私も気分よく夫とお喋りしながら、いい感じでウォーキングを楽しんでいた。

久しぶりに快調快調！

と、その時、私の足元に不思議な違和感が生じた。

あの「ムニュっ」とした感じ。

嫌な予感…。それは、まさしく子どもの頃、味わったあの感触と同じだった。

ゲゲッ!!やっちまったー?!

フラッシュバックのように、この後の展開がわかりすぎて怖かった。

だが、一つだけ違っていたのは、おニユウの靴ではなかったことだ。

それだけが、唯一、救いといえば救いだった…。

私は、恐る恐る足元を見た…。

すると、奇跡が起きていた！

なんと、お犬様のウンはビニール袋に包まれていたのだ！

ありがとう、ビニール袋！！

辛うじてビニール袋は破れずに、私の靴を守ってくれたのだ！

だから、へんな話、ビニール袋の落とし主への怒りよりも、

ひたすらビニール袋への感謝しかなかった。

「これって、超ラッキーっていうことだよな？」

「??？」

夫は、呆れながらも、悲喜劇の顛末を笑いながら見届けてくれた。

人間万事塞翁が馬。

人生、最後まで、ほんとうに何が起こるかわからない。

「虎の穴」出身?!

少し前の話だが、地方の動物園で双子のアムールヒョウの赤ちゃんが生まれたニュースを見た。

手足は小さいうちから立派だけど、しぐさの可愛さは、やはりネコ科の動物だ。

アムールヒョウといえばアムールトラだ。

アムールトラの姿かたちの美しさは圧倒的だけど、

写真を見ただけでも身震いするほど獰猛で、とても近寄りがたい。

なんたって、虎だから!

虎と言えば、「虎の穴」のことをふと思い出した。

昔、といっても、もう50年近く前の話になってしまうが(笑)、

その頃、子ども達の見るテレビ漫画はごく限られていた。

男女関係なく、みんな同じテレビを見ていたのだと思う。

だから、私の楽しみも「タイガーマスク」と「巨人の星」だった。

「タイガーマスク」は、昔の人ならきっと知っているプロレス漫画だ。

「虎だ、虎だ、お前は虎になるんだー！」というセリフは今でも忘れない。

そして、主人公の伊達直人は、「虎の穴」出身だった。

詳しいストーリーまでは忘れたけれど、

「虎の穴」が、とにかく厳しい訓練を課す場所だということだけは覚えている。

そして、伊達直人は、自分の稼いだファイティングマネーを

たしか「ちびっこハウス」(?)という孤児院の子ども達に送って

いたと記憶している…。

主人公の辛い過去も話に散りばめられており…。

子ども心に、ただただ厳しく悲しい印象が強烈に残っている。

さて「虎の穴」にまつわる自分の話だ。

それは、私が働き出して初めての職場でのことだった。

そこに着任したのが運の尽きだったのか、

とにかくその職場の先輩、とくに女性の先輩達は皆とても厳しかった。

若い私達は、陰では「またお局サマに苛めれた～」

などと言い合って泣き寝入りしていたけど、

いま考えたら、パワハラ、モラハラは普通にあったのだと思う。

けれど、いかんせん仕事のできない若い自分たちは、

叱られて当たり前だと思っていたし、

強制ではなかったにせよ、夜中の12時近くまで普通に職場に残って働いていた。

それこそ、今でいうブラック…だったと思う…。

(もちろん今はもうそんな悪しき風習? はないと思うが…。)

「虎の穴」出身?!

それでも、当時、先輩達からの「しごき」は指導だと思っていたし、

この「しごき」に耐えられなければ、一人前にはなれないのだと信じていた…。

ただ、「しごき」を受けたのは私だけでなく、

新人で入った者はすべからく登竜門として

お局サマ達の洗礼を受けることとなった。

実際、身体をこわしてしまったり、心を病んでしまった同僚もいた…。

自分もかなりの無器用で、てんで使いものにならず、

お局サマの逆鱗に触れる仕事っぷりだったけど、

根が固太かったのか、鈍感だったのか、辞めるという選択はなかった。

「アンタねえ、ここで勤まればどこへ行っても大丈夫だから」

お局サマは、いつも私にそう言った。

他の同僚たちも、同じことを言われたという。

「ホントかな…。」

叱咤激励のお言葉だったのだろうけど、

私は心の中でいつも呟いていた。

そして、自分が年をとっても、

お局サマみたいには絶対ならないゾと、

勝手に反面教師化して耐え抜いた…。

けれど、今思えば、あれは愛のムチだったのだとも思う。

事実、年を重ね、自分も年長になっていった時、

後輩たちに、愛ある指導ができたとは、とても思えなかった。

教える側と教えられる側の関係性にもよるが…。

互いの信頼関係があれば、悲しい結果にはならないと信じたいが、

私には、そこまでの嫌われる勇気も覚悟もなかった…。

というか自信がなかったのだ。

残念ながら、昔の先輩達の情熱や熱い教えを

こうして引き継ぐことはできなかったけれど、

本当に貴重な良い勉強をさせてもらったことを

心から感謝している。

かなりのレア体験だったと今でも密かに自負している。

「虎の穴」出身?!

さて、一緒に辛酸を嘗め合った戦友たちも、

何年かすると、それぞれが違う職場へと旅立っていった。

そして、時が流れ、ずいぶん年を重ねてから、

偶然にも、当時一緒に苦楽を共にした同僚と再び同じ職場になった。

久しぶりの再会だった。

私達は十何年ぶりに、二人で飲みに行った。

昔は、よく二人で、ぐでんぐでんになるまで飲み明かしたものだっただけ。。

私は懐かしさのあまり、

昔、苛められた先輩達の話に酒の肴にしようとしたけど、

彼女は、あの頃のことは一切覚えていないと言いきった。

あの時代の記憶だけ、なぜかスッポリ抜け落ちていると言うのだ。

彼女にとっては、もう思い出したくもない過去なのかもしれない。

それだけ、ものすごく辛かったのだろう。。

「今だから言うけど、あの時、私、遺書を書いたんだヨ。。」

彼女は、ポツリと言った。

彼女のほうがよほど苦勞していたことを改めて思い知った。

そして、最後に、彼女は明るくこう言った。

ねえ、私達って、「虎の穴」出身だよな！

名言だと思った。



おっばいがいっぱい！

小さな子どもは本当に可愛い。

「三歳児クン」という漫画絵本が我が家にもあったけど、

ちょうど3歳くらいの子の言動は本当に可愛くて面白くて癒される。

子育て真っ盛りのお母さんにとっては、愉快的なことばかりではないと思うが、

通りすがりの人間としては、三歳児クンとの出会いはいつもワクワクさせられる。

先日、久しぶりに銭湯に行った。

銭湯といっても、昔の銭湯とは規模も雰囲気もずいぶん変わってしまった。

唯一、変わっていない光景は、今も昔も親子連れが多いということか。

さて、フィットネスジムのようなコインロッカー付きの脱衣場で服を脱いでいると、

私の近くに、若いお母さんと小さな男の子がやってきた。

男の子は、たぶん3,4歳くらいだろう。

服を脱ごうとしながらもお喋りが止まらず、何かとお母さんに質問を投げかけていた。

お母さんはいつものことのように、三歳児クンの問いかけを淡々と受け流していた。

元気いっぱいの子に比べ、そのお母さんは少し疲れているように見えた。

けれど、好奇心旺盛なこの時期、

毎日毎日の質問攻めに全力で応答していたら、きっと身がもたないだろう…。

さて、その三歳児クン、どうやら女風呂に連れて来られたのがご不満らしい。

男の子は「ああ、イヤだなあ、オンナのふろ」としきりに言っていた。

小さくたって、きっと恥ずかしいのだろう。

もちろん、お母さんは動じることなくノーリアクション。

すると、男の子が大きな声で言った。

「ああ、イヤだなあ。おっばいがいっぱいだ！」

なんて、可愛いんだろう！

服を脱ぎながら、思わず吹き出しそうになった。

私がチラ見すると、冷静だったお母さんの顔も、ホワッと和らいでいたのが嬉しかった。

思いがけず幸せのおすそ分けを頂いてしまった。

いつの時代も、子どもの数だけ幸せがある。

金魚にヤキモチ焼いた子

唐突だが、動物も焼きもちを焼くという。

ペットの犬や猫たちがご主人に構ってもらえず、

焼きもちを焼いているような動画を時々見ることがある。

そんな姿は人間と同じで、いじらしくて可愛い。

言葉はなくても、ペットは一途にご主人様を愛しているのだ。

残念ながら、自分にはそんな経験はなかったけど、

反対に動物に焼きもちを焼いてしまったことはある。

正確には動物というより生物だが…。

赤いべべ着た

かわいい金魚

お目目を覚ませば

ごちそうするぞ

……童謡「金魚のひるね」より

たしかNHKの「みんなのうた」だったと思う。

幼稚園児だった私は、

テレビから流れるこの歌を聴くたび、

金魚に激しく嫉妬したのを覚えている。

テレビ画面には、

金魚鉢に入った赤色の金魚が一匹だけ映っていた。

本物ではなく、作り物の金魚だったように思う。

それは、とっても可愛い顔をした金魚だった。

だけど、いつも思った。

金魚は、ただ寝ているだけで、

どうして御馳走が貰えるのだろうか？ と。

どうしてそんなに可愛がって貰えるの？ と。

金魚だけずるい、って…。

子どもの頃、

私は、金魚にも嫉妬する、

たいへんな焼きもち焼きだったのだ。

今、考えたら笑ってしまうけど、なんともイタイ話だ。

愛を独り占めしたい気持ちは、愛を知ってしまった生き物のさがなのかもしれない。

絶妙なバランス

若い頃、お洒落な洋服が欲しかったけど、

買うお金が無かった。

年を重ね、やっと洋服が買えるようになったけど、

着られる服はもう無かった。

若い頃、美味しい物をお腹いっぱい食べるのが夢だったけど、

いつも空腹だった。

年を重ね、何でも食べられるようにはなったけど、

もう食べたくなくなっていた。

若い頃、何処かに行き、誰かを求めて彷徨ったけど、

心は満たされなかった。

年を重ね、何処へ行かなくても、

いつも自分がそばにいてくれたことに気がついた。

若い頃、気力に満ちていたけど、

自分が嫌で、他の誰かになりたくて、もがき苦しんだ。

年を重ね、努力する元気はもうなくなったけど、

少しだけ自分が好きになっていた。

若い頃、理想を追えば追うほど、

ますます現実近づいた。

年を重ね、手放せば手放すほど、

心が満たされていった。

若い頃、許せない人がいて、

許せない出来事があって、

許せない自分がいた。

年を重ね、ただ許したくなかっただけの自分に気づいたとき、

見える世界が変わっていた。

1 万分の 1 の確率！

一昨年くらいから、私はある宝くじを一口ずつ買い続けていた。ナンバーズ4だ。

今はネットで簡単に購入でき、当選番号もネットですぐに通知されるから便利な時代だ。

だが、これが良くなかった。明日こそ、きっと当たるような気になってしまったのだ。

ギャンブラーではないけれど、私は止め時を完全に見失ってしまった。

こんなに毎日毎日、頑張って買い続けてきたのに、もし、買うのを止めた次の日に、自分の番号が当選していたらどうしよう?!という変な恐怖に襲われてしまったのだ。

我ながら、たいへんな執着ぶりだ。だが、昨年末、さすがにもう諦めた。

数字には強くないが、仮に4つの数字がストレートで揃うとしたら、

$$1/10 \times 1/10 \times 1/10 \times 1/10 = 1/10000 \text{ になる。}$$

1万分の1の確率なのだから、やはり私に当たるわけないよね...という結論だ。

もし毎日せっせと買い続ければ、3、4年に1度はストレートで当たるらしいが...

とはいえ、止めてからも、当選番号が気になって仕方がない。

そして、私は、毎朝、新聞の当選番号欄を恐る恐る見るはめになった。

どうか当たっていませんように (笑) だが、とうとう、その日が来た。

先日、ずっと買い続けていた4桁の数字が、ついにストレートで出たのだ！

1万分の1の確率！ ガーン、あとひと月、粘っていれば...

だけど、薄々、そんな気がしていた。追えば逃げるけど、諦めると何故か、やってくる法則...

やっぱりか...。落胆と、来た～！ というタラレバの世界での喜びが入り混じった気分だった。

宝くじではないけれど、他のことでは結構な確率で当たっている。

ちょうど裁判員制度が始まった年、もう時効だからいいけど、裁判員候補者の通知が来た。

これは、5千分の1の確率だそうだ。

候補者に当たっただけで、実際に裁判員となることはなかったが、いつ呼ばれるのかと一年間ドキドキハラハラだった。

そして、最近では、何年か前の年金機構の情報漏えい当事者となってしまった。

年金機構からのお詫びの文書が届いて、初めて知った。この件については、ほとんど他人事と思っていたので、けっこうショックだった。

ちなみに、夫はどちらにも当選？ していない。自分は悪運なのか？ 強運なのか？

さて、ジャンボ宝くじ1等の当選確率は1千万分の1の確率だそうだ。

これは、雷に打たれる確率と同じらしい。なんと飛行機が落ちる確率よりもはるかに低いとは…。

ちなみに、私の住んでいる北海道の上空から1円玉を落として頭に当たる確率と同じだとか…。

にもかかわらず、自分に当たるような気がしてしまうのは、私だけだろうか。

オオトカゲと泳いだ男

説明しても誰も信じてくれそうにないが、超ビックリな体験がある。

夫と二人でランカウイ島に行った時のことだ。ランカウイはマレーシアにある小さな島だ。

その昔、チャーター便が年末の一時期、地方からも飛んでおり、直行便で行くことができた。

時差もそれほど無く極寒から南国にワープできるのが嬉しくて、四の五もなく、私達はあっさり、機上の人となった。

どこまでも続く白砂ビーチは綺麗だったが、海は意外と透明感がなく濁っていた。これは汚れて濁っているのではなく、海水に石灰岩が混じっているからだとか。印象的だったのは、砂浜に西洋松がたくさん茂っていたことだ。浜辺に松の木林が連なる風景は、北国の海には見慣れない景色だったので不思議な感じがした。そして、そこにはたくさんのおサルさんや多様な生き物たちが生息していた。

さて、事件は、憧れのインフィニティプールで起こった。

海とプールの水面が一体化して見えるインフィニティプールは、眺めてるだけでもテンションが上がる。だが、ワンピース水着を着ていた私は、現地ですぐに違和感を感じた。周りはみな、老いも若きもボンキュッポンのビキニ姿なのだ。そんな中、スクール水着さながらな私。よく見ると、こんな水着を着ているのは私とチビっ子達しかいないではないか。さすがにこれは恥ずかしい…。なので水泳担当は夫に任せ、自分はパラソルの下で、なんちゃって読書を気取ることにした。おかげで、持参した大好きなバッシュールのシリーズが大分読めた。

ところで、夫は夫でハリきって、ひとりプールの中をスイスイと魚になって泳いでいた。

しばらくして、夫がプールから上がってきた時のことだった。

何とプールから出てきた夫の後ろから、巨大な生き物が一緒にプールを上ってきたのだ。

一瞬、目を疑った。それは、体長が、ゆうに1mくらいはある紛れもないオオトカゲだった。

「うしろ！ うしろ！」大声で叫んだけれど距離があって夫は気づかない。何も知らない夫はニコニコしながらパラソルに戻ってこようとしている。オオトカゲも夫の後をついて私のところへ来るのかと思いきや、何とプールサイドを我が物顔でゆっくり移動し、プール脇にある藁ぶきの小屋をよじ登っていった。そして、その小屋の屋根のテッペンまで登りつめるとドボンとプールにダイブしたのだ。そして、しばらく泳ぐと、再び

プールから上がり、またプールサイドを移動して小屋のテッペンまで登り、またプールに飛び込むという行動を繰り返した。

まさか遊んでいる？ いや、オオトカゲは完全に遊んでいた！

だけど、みな何故この光景に驚かないのだろうか？ ランカウイではオオトカゲも普通にプールで遊ぶのか？

今さらながら、動画が撮れなかったのが本当に残念だった。夫が泳ぐ後ろをオオトカゲが泳いでいたと想像するだけで今でも笑ってしまう。その後も、ホテルの庭などで、たびたびオオトカゲを見かけた。もしかすると、オオトカゲはこの土地の主だったのかもしれない。

ランカウイでの忘れられない思い出だ。

奇跡の上海蟹あんかけ麺

上海蟹のあんかけ麺がどうしても食べたくて、

香港へ出かけたことがある。

ちょうどテレビの旅番組で芸能人が美味しそうに食べているのを見て、

私も無性に食べたくなってしまったのだ。

とろみがあり、カニがいっぱい入っている麺は見るからに美味しそうだった。

黄金色に輝くその麺は、いったいどんな味がするのだろうか？

私もいつか食べてみたい…、いや絶対食べる！ 今すぐ食べる！

「ラーメンたべたい♪今すぐたべたい♪」

私は昔懐かしい矢野顕子の「ラーメンたべたい」の歌状態となってしまった。

当時は自分にもそんなエネルギーがあったのだ。

ストレスの反動とは言え、人間のパワーは溜まると凄い。

さて、どれだけ上海蟹あんかけ麺が美味しいかについて、

しつこく洗脳した甲斐あって、旅の伴は夫が同行してくれた。

休みが取れず、おかげでほぼ弾丸ツアーになってしまったが…。

ところで、念願の、その麺が食べられるお店。

ネットで住所を調べ、旅行雑誌の切り抜きも持参し、準備万端だった。

今回こそは無事に辿り着けるだろう！

「上海蟹には時期があるらしいけど、

その店は一年中食べられるらしいからラッキーだよね～」

余裕の私達は前哨戦を兼ね、

ホテルのラウンジで調子よくワインをガブ飲みしてしまった。

そして不覚にも、

私は上海蟹を食べる前に出来上がってしまったのだ…。

これが失敗のはじまりだった。

というか、奇跡の道のりへの第一歩となっていくのだった。



奇跡の上海蟹あんかけ麺

またまた珍道中が始まった。

香港へは返還前にも訪れたことがあったけれど、かなりの認識不足だった。

今回、我々は香港島の向かいの九龍半島側に滞在していた。

雑誌でカオルーンという地名をよく見かけ、いったい何処かと思い、とても行きたくなったが、それは、九龍のことだったと後から知った。私達は最初からカオルーンに来ていたのだ。

さて、歩いていると「〇〇酒店」という看板がそこかしこにある。酒店というからには酒屋さんなのだろうか？ それにしても立派すぎる…。だが、酒店は、ホテルのことだった。

ちなみに我々の泊まったホテルは中国語表記で「香港洲際酒店」だった。そこは九龍の尖沙咀の先端にあった。ビルのど真ん中に穴が開いているのをよく見かけたが、それは龍の通り道なのだそう。そのホテルも龍の通り道にあるらしく、夕方になると九龍の山に住んでいる龍が水を飲み、このビクトリア湾に舞い降りるのだとか。なので風水でいう強力なパワースポットらしい。だけど、龍なんて、いるわけないだろう…。私は、はなから高をくくっていた。だがこの後、龍のパワーの凄さを思い知らされるのだ。

話は遡り、その優雅な「香港洲際酒店」のラウンジにはイブニングカクテルのお楽しみがついていた。

夕方の時間だけアルコールが飲み放題だったのだ。ここぞとばかり、つつい飲みすぎてしまった私は、ラウンジから出た時には、もう千鳥足だった。外はたっぴりと日が暮れ、街中はじゅうぶんに賑わっている。雨上がりで道は濡れていたけど、気持ちがいい。

さあ、いよいよ念願の上海蟹あんかけ麺だ！

ホテルの立派な玄関を出て、これまたもの凄く立派な庭園の中の階段状のエントランスを気分よく歩いていた時、私に衝撃が走った。

スッターン！ 本当は一瞬だった。まるで後ろからもの凄い力で突き飛ばされた感覚だった。気がつくとい私は、庭園の階段から足を滑らせ前のめりに転んでいた。

だ、だいじょうぶか?!暗がり、急に撃沈した妻を夫が咄嗟に引き上げてくれた。

幸い、頭や顔をぶつけることはなかったものの両脛を強打してしまったようだ。

酔っていたからか、痛みはそれほど感じなかったが、脛を見ると流血していた。

こんなところで転んでしまう妻のカッコ悪さを笑うに笑えない夫は、私の身を案じ、ホ

テルに引き返す提案をしてくれた。だが、何としてもゴールに辿り着きたかった私は、痛い足を引きずりながらも、夫を従えて、またしても路頭に迷うコースを歩むのだった。

奇跡の上海蟹あんかけ麺

ネイザンロード（彌敦道）にキンバリーロード（金巴利道）、通りには色々な名前がついている。漢字（広東語？）と英語で書かれた標識を見ても実際なかなかわかりにくい。

ところで、今さらだが上海蟹は上海で獲れるのだから本場は上海なのだろう。食い意地はあるが、杭州料理と言われてもよくわかってはいなかった。とにかく、みいちゃんはあちゃんの、なんでも食べたい一心で私は香港にいた。

それにしてもここはカオスだ。人の数も凄いけれど同じくらい店の数も凄い。どの道を曲がっても同じような看板の店が延々と続いている。予想はしていたが、持参した地図は何の役にも立たなかった。住所にあるオースチンロード（柯士甸道）はいったいどこなのか。歩けど歩けどお目当ての店は見つけられなかった。やっぱり無理かも…。弱気になってくると両脛がますますヒリヒリと痛くなってきた。

もう諦めよう。上海蟹あんかけ麺よりも私には絆創膏だ。私達はドラッグストアを探すことにした。またまたしばらく歩いたけれどこれは何とか見つかった。無事に絆創膏を買い、店先で私は両脛を手当てした。大きなサイズが無かったので絆創膏を10枚くらいつけて貼った。

さあ、もうホテルへ帰ろう…と歩き出したその時、なんと目の前に探していた店があった！

これだ！ テレビで見た看板と同じだ！ ヤッター!!とうとう見つけた！

だが店の中が薄暗い。人影もないし何だか様子を変だ。これは、まさかの閉店ガラガラか…。ダメ元で店のドアを開けた。すると店主らしき人が怪訝そうな顔で私達を見た。歓迎されてない雰囲気は十分に感じたけれど、もうそんなことを気にしてる場合じゃない。私が「まだいいですか？」的なことを尋ねると、その無愛想な店主から「ああ」的な返事が返ってきた。たぶん店を閉めようとしていたところに、この日本の珍客が飛び込んできた感じだったのだろう。

メニュー表は読めないけれど直感的に上海蟹あんかけ麺がどれかがわかった。だが驚くほど値段が高い。た、たかすぎる…。仕方なく私達は二人で麺を一つだけ注文した。毎度のことなのか店主は「はいよ」とばかり淡々と調理にとりかかってくれた。もはや招かざる客でもなんでも構わない。憧れの店に辿り着いたのだから。待ちに待ったその麺は言うまでもなく美味しかったけれど、私はここに辿り着けた奇跡に興奮していた。

もし、あそこで絆創膏を買わなかったら…あのとき階段でテッ転ばなかったら…夕方、龍の通り道のラウンジで酔わなかったら…そもそも九龍のあのホテルでなかったら…この黄金色に輝く上海蟹あんかけ麺を頂戴することはできなかつたのかもしれない。私の背中を押したのはやはり九龍山の龍だったのか。恐るべし龍のパワー。点と点がつながった瞬間、奇跡は起こる。

少々、手荒いおもてなしだったけど、あのとき以来、私は龍の存在を信じている。そして、いつか龍の背中に乗って思いっきり大空を駆け抜けたいと今も本気で思っている。

屁理屈こきの幸せ論

今日は屁理屈な話がしたくなった。

「幸せになるために、わたしたち生まれた…」って歌の歌詞があるけれど、

はたして私達は生まれた時、まだ幸せではなかったのか？

それとも、生まれた時は幸せに溢れてたけど、

生きていくうちに幸せではなくなっていくのか？

幸せのために...

幸せな人...

幸せな人生...

幸せですか？...

幸せって、なんだろう。

幸せに「なる」と表現すると、混乱する。

幸せは、どこか遠くにあって、追い求める存在になってしまうから。

でも、幸せで「ある」と表したら、なるほど落ち着く。

そもそも、幸せだったと気づける。

幸せだと感じられる状態が、幸せで「ある」。

たとえば幸せそうに見える人も、

その人が本当に幸せで「ある」かは、本人にはわからない。

こうだから幸せとか、不幸せということでもない。

自分の心だって、昨日と今日、さっきと今で、コロコロ変わる。

常に毎日、幸せな気分でいられたらいいけど、そんなことはない。

不幸のどん底に落ち込むときもある。

でも、それでいい。

誰かに奈落の底に突き落とされたわけではない。

私が味わいたいから味わっているのだ。

そして、どんな感情も、一瞬一瞬、

生まれては消え、生まれては消えていく。

実体がなく無常なるもの。

やはり、「いま」しかない。

けれど私達は、いま感じるその気分を自由に味わうことができるのだ。

これは、なんと幸せなことだろう。

やはり屁理屈こきだろうか。

知りたがりのホトトギス

私は、知りたい。

私は、学びたい。

何のためにとか、

誰のためにとか、

そんなためでなく。

私は、知りたかったのだ。

私は、学びたかったのだ。

それで、どうするの？

それが、何になるの？

そんなことを気にすることなく。

お役に立てなくていい。

お金にならなくていい。

鳥が鳴くように。

花が咲くように。

ただ私のために。

私は、知りたい。

私は、学びたい。

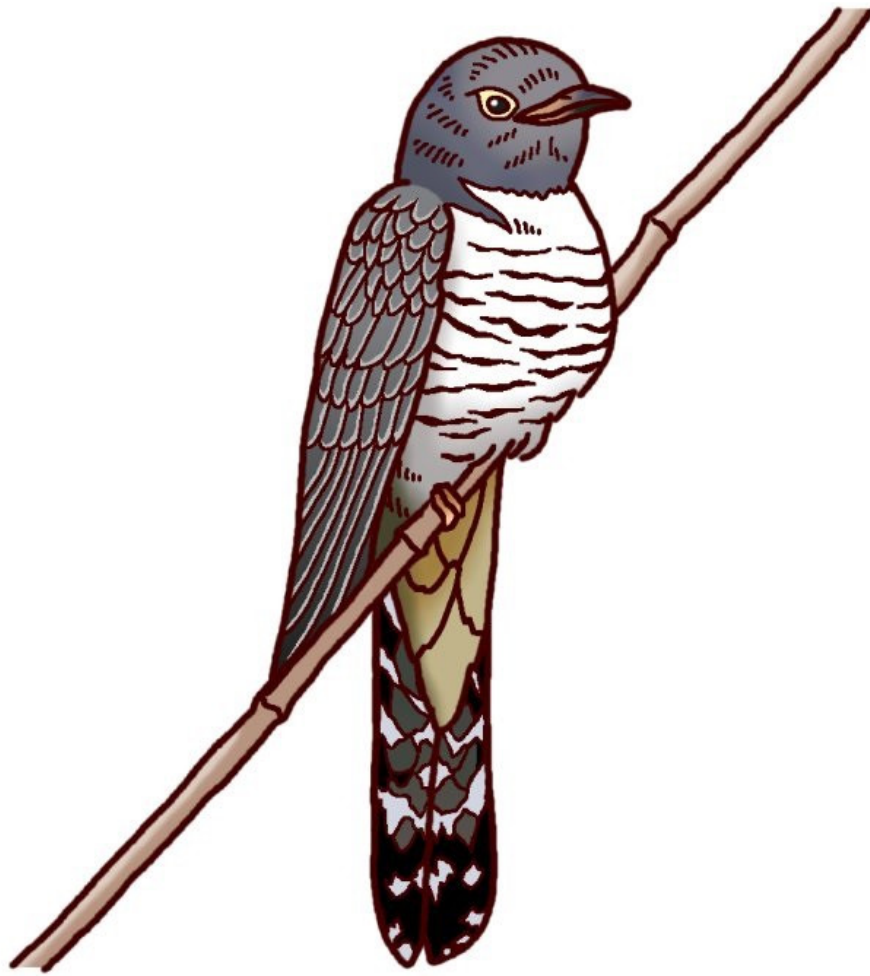
この世界のことを。

宇宙のことを。

生きることを。

私のことを。

死ぬまでずっと…。



号泣するネアンデルタール人

先日、朝方にとっても不思議な夢を見た。

男性が一人で歌を歌っていた。

男性の姿かたちは、わからなかったけれど、

その歌声は、今まで聴いたことのないほど美しかった。

ワー、なんて綺麗な声なのだろう。

夢の中にあっても、私はウツトリと思わず癒される感覚を覚えた。

すると、突然、私の目の前に旧石器人類のような大きな顔が現れた！

顔がものすごくアップされて私の眼前にあったので、

顔の皺の刻みや皮膚の色まで、はっきりクッキリとわかった。

現代人の顔とは、およそかけ離れているけど、決してチンパンジーやゴリラではない。

だが、映画で観た「猿の惑星」の顔とも違っていた。

顔の周りも毛で覆われてはいない。かなり人間に近い顔だった。

もしかしてネアンデルタール人？

夢の中で私は考えた。すごい、すごすぎる。

なんと驚くことに、彼もまた、男性の歌声を聴いていたのだ！

そして、その歌声を聴き終えると、突然、彼が大きな声をあげた。

ワーッ、こわいヨ～！ 私は一瞬、恐怖を感じた。

だが、彼は襲撃してはこなかった。

何と、もの凄い大きな声で号泣したのだ。

それは犬や狼の遠吠えにも少し似ていた。

だが、その雄たけびは、歓喜の声だとわかった。

彼もまた、その男性の美しい歌声に感動していたのだ！

たぶん、まだ言葉を持ちわせてあわせていないだろうその旧人類は、

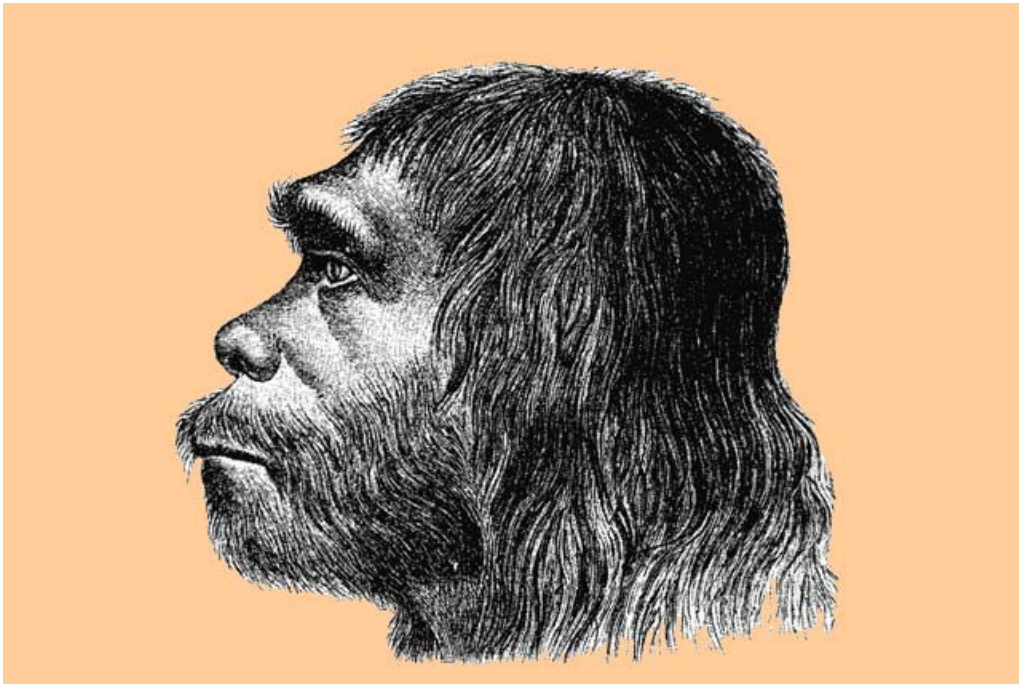
こんなふうに自分の感情を表すんだなあ…と、

夢の中にいながらも私は妙に納得してしまった。

けれど、なんとピュアなのだろう。原始の時代から、感動があった。愛は存在していたのだ！

世にも美しい歌声の余韻と、ネアンデルタール人の純粋さに感動した神秘的な夢だった。

だが、その日、さらに神秘的なことが起こったのだ…。



号泣するネアンデルタール人

明け方にネアンデルタール人の夢を見たちょうどその日の午後、

私はある方から手紙を頂いた。

ご縁があって、文通をさせて頂いている方からの便りだった。

だが、その便りを読み、私は愕然とした。

近況報告の最後に、

なんとネアンデルタール人についての話題が綴られていたのだ！

NHK テレビでホモサピエンスの放送があり、

我々ホモサピエンスの2%にネアンデルタール人のDNA 遺伝子が入っていると知り、

とても驚いたと書かれてあったのだ。

私はそのテレビを見ていなかったし、そのような知識もなかった。

これはもう「予知夢」としか言いようがない…。

ちなみに、その遺伝子はアフリカ人には無くて、

アフリカを出てアジア・ヨーロッパ人になぜか受け継がれているらしい。

手紙を読み終え、

夢の中で号泣していた彼はネアンデルタール人だったと、ますます確信した。

それにしても、偶然とはいえタイミングが良すぎるではないか。

やはりシンクロニシティだろうか？

冗談ではなく、遠感現象とかテレパシーってあるのかもしれない。

けれど、時空を越えてすべてが繋がっていると仮定したら、

縁ある人とのシンクロも、

ネアンデルタール人との交信もなんら不思議なことではない。

ここにきて、新しい楽しみが増え、ワクワクを超えて、

もはやゾクゾクしている。

さて、つぎはどんな世界と出会えるのだろう。

できれば、愛ある世界でお願いしたい…。



国内旅行でダブルブッキング?!

少し前、久しぶりに国内を一人で旅した。

ひとり旅はしばらくぶりだったので内心ドキドキ、

とにかく何ごとも起きず無事に戻って来られますように…。

だが、お約束通り、今回も小さなドキドキがあった。

飛行機で出かけたのだが、さっそく空港までの移動場面で。

指定席を買ってJRに乗り込み、まずはひと安心、席について出発を待っていると、

二人連れの外国人が乗り込んできて、私の席の前に立ち、切符を見ながら何やら話している。

よくわからなかったけれど「自分たちの席は、ここのはずなのに変だ！」

というニュアンスだった。

えーっ？ 私はあらためて自分の切符を確認したけど間違っていない。

だが、ナントその人たちの座席番号も同じらしかった。なぜ…？

すると、通路を挟んで座っていた日本人男性が英語でその二人に

「切符を見せてください」と話しかけてくれた。

そして、謎はすぐに解けた。その外国人達は、一本早い電車に乗り込んでしまっただけだった。

難なく、二人は安心して去っていった。万事休す。

それにしても、その男性のスマートな英語力。咄嗟に必要な英単語が出てくるのが羨ましい。

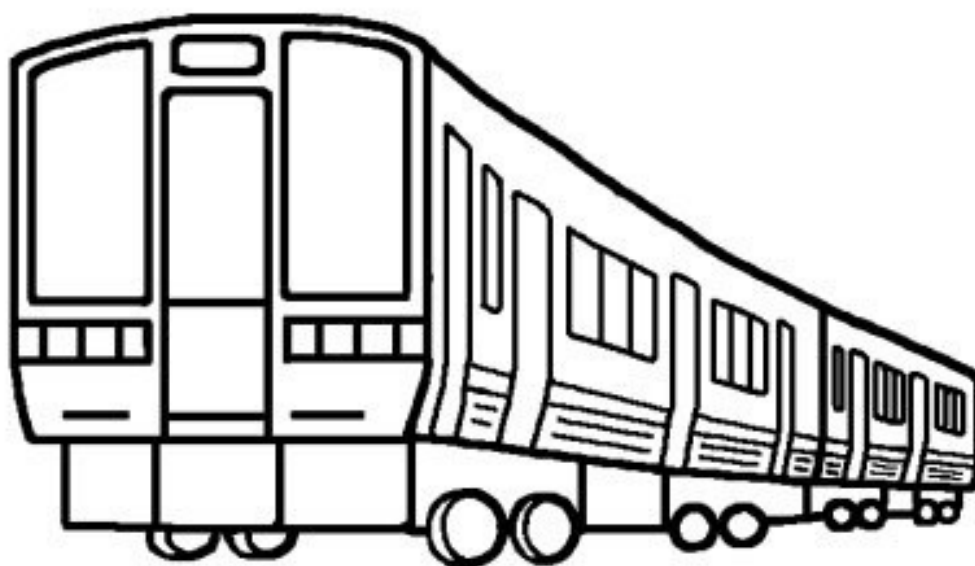
使える英会話とはこのことか。カッコいい！

私は今まで何のためにスピードラーニングしてきたのだろうか？

まだまだ経験値が低いってことか…。

だが、この後、またまた珍事件発生！

今度こそ、ダブルブッキングか？



またしてもダブルブッキング?!

さて、旅の続き。

空港に到着し、後は飛行機に乗るばかりだった。

保安検査場で何故か私だけピーピー鳴り、靴を脱がされはしたものの、無事に機内に乗り込むことができた。

狭い通路を進み、通路側の自分の席に辿り着くと、老紳士が荷物を頭上の荷物入れに入れていた。

そして、親切なその男性は、私の荷物も一緒に入れてくれた。

「ありがとうございます！」たぶん、この人は私の隣の席なのだろう…。

すると、その紳士は「お隣へどうぞ」と私を真ん中の席へ促し、自分が通路側の席に座ろうとした。

あれれ？ またもや、ダブルブッキング??

だが、今回は日本人だったので、私は自信をもって

「あもう、私の席は18のHなんですけど」と伝えることができた。

だが、なんとその男性、「ボクも18のHです」と言うではないか!?

そんなバカな…。一瞬、頭が混乱した。まさか、どちらかが、乗る飛行機を間違えたのか??

でも、列車じゃないし、そんなことはあり得ない…。ほんの何秒かだったけど、私はあらゆる可能性を総動員した。

だけど、これも、すぐに解決された。

その男性が自分のチケットをポケットから取り出し、

「あっ、間違えた、18じゃなくて17のHだった！」と言って、私の一つ前の席に移っていった。

内心、おいおい、お願いしますよ～、だったけど、

お茶目で親切な老紳士さんに免じて、スルーすることにしよう。

私も、かなりのおっちょこちょいだから他人のことは言えない…。

ちなみに、帰りの飛行機は少し奮発して珍しくクラスJにした。

ゆっくり寝て帰る予定だったが、なんとお隣は、

泣く気マンマンの赤ちゃんだった (笑)

こうして無事に帰ってこられただけで満足なのだけど、

神様は本当にいたずら好きだ。

ダブルブッキングで試される人間力!?

ダブルブッキングのことを書いていたら、何とも苦い思い出がよみがえった。

京都旅行の帰り、京都駅から関西空港までのリムジンバスに乗ったときだった。

バスを待つ人々は国際色豊かで、可愛い赤ちゃんを連れた欧米の女性と一緒にになった。

会話を交わすことはなかったが、その綺麗な女性は終始にこやかだった。

さて、バスの座席はあらかじめ指定席が決められていて、私は最前列だった。

京都八条口が始発かと思ったが、到着したバスにはすでに二人の乗客が乗っていた。ちょっと嫌な予感…。そしてバスに乗り込むと予感は的中。よりによって私の席に日本人夫婦がデーンと座っていた。

「すみません、運転手さん、このバスは座席が決まっていますよね？」私は速やかに尋ねた。

すると車掌は、「いいよ、いいよ、どこに座ってもいいから」と言ったのだ。

すでに座っていたその人達は一瞬移動しようとはしたが、その車掌の言葉を聞いて安心したのか、席を立つことはなかった。

でも、この人たちだって席が決まっているはずだ。なんか変。どこに座ってもいいと言ったって、みんな指定席の切符を持って乗って来るのに、私はどこに座ればいいのか…？

そうこうしているうちに後ろからどんどんと人が乗ってくる。私は仕方なく、後方の席にとりあえず腰を下ろした。

すると案の定、さっきの欧米の女性が私の席にやってきて、ここはワタシの席だ！

とすごい剣幕で主張してきた。指定席制なのだから当然だ。

その女性はフランス語で、自分の切符を見せながら、もの凄い勢いで私に畳みかけてきた。

先ほどの美しかった顔が豹変し、鬼の形相となっていた。

「アナタも指定席が決まってるでしょ？ アナタ自分の切符の番号を見てごらんさないよ！」

そんなニュアンスだった。ところが、この状況を運転手に抗議したくてもずいぶん後ろの座席にきてしまって運転手にも伝えられない。

乗客は次々と乗ってくる。だけど、他の人たちは、みな無事に自分の指定席に座れていた。

ダブルブッキングは私だけだった!?

私だって自分の席に座りたかったのに、他の人に座られてしまったのだ！

運転手がどこに座ってもいいって言ったんだヨ！ と訴えたかった。

だが完全にテンパった私はフランス語など話せるわけもなく、英語の単語すら出てこなかった。

彼女は依然として私に「とにかくアナタ、自分の切符を見なさい！」と猛抗議し続けてきた。

確かに彼女は間違っていない。だが正しいことを正しいと主張する姿は迫力ありすぎて怖かった。

ところが私も、握りしめていた筈の肝心の切符をどこにしまい込んだのか何故か見あたらない。

もし切符さえ見せられれば、少しはこの経緯を（私の無実を？）説明できたのだけど…。

うまくいかないときはこんなもんだ。そうこうしているとバスが動き出した。

彼女は納得のいかない様子だったが、仕方なく空いてる席を見つけて座った。

彼女の視線が背後から突き刺さる。関空につくまで私のテンションがダダ下がりだったのは言うまでもない。

私は、塩をふられたナメクジみたいにザンネンな生き物状態となってしまった…。

降車時に運転手にクレームを言おうと思ったけど、非常に混雑していたことと、私にそんな気力が残ってなかったりで、それも叶わなかった。

ダブルブッキングで試される人間力。

あとから思えば、試されたのは、私のみならず彼女も同じだ。

ちなみに、翌年、京都に行った際には、バスは自由席に変わっていた。

やはり、ダブルブッキング騒動が勃発していたのだろうか?!

青なのか緑なのか (その1)

たぶん私だけではないと思っているのだが、子どもの頃から不思議に思っていたことがある。

それは、信号機の色だった。

大人たちから「青信号」と教えられたけれど、信号の色は青ではなくて緑色ではないか？

なのになぜ、青と言うのだろうか…。もしかして本当に青色で、私だけが緑色に見えるのかな？

どうして、緑信号って言わないのだろうか…。

信号の色表示の由来は諸説あることはじきに何となくわかったけど、私の疑問はまだ続いた。

たとえば、青いリングは、少しも青くないし、黄緑色だ。

青々とした木々の色は、青ではなくて緑ではないか。

青虫はどう見ても緑の虫だし、青汁はもはや緑汁以外の何ものでもない。

なぜ緑と言わないのだろうか…。ずっと納得できなかったが、あるときふと考えた。

もしかして、昔は緑と言う色の名前が日本にはなかったのかも…。

緑色は存在しても、青色も緑色もすべて青と呼んでいたのではないかと…。

これなら納得がいく。遅ればせながら、やっと腑に落ちた。真偽のほどはご容赦願いたい…。

では、お尻が青いは、どう？

確かに、赤ちゃんのお尻の蒙古斑は青く見える。まだまだ半人前の青二才ってことか。

青いと表すことで、より初々しきや新鮮さがリアルに伝わってくることは確かだ。

日本語は本当に奥深い。

もし赤が成熟だとすれば、青はまだ未熟な状態か。古来、日本では赤の対照が青だったのか？

赤が血の色だとしたら、エネルギーでパワフル。ほとぼしる生命力を感じさせる色だ。

青には血の気を感じないけど、冷静で落ち着きがある。空の色や海の色そのものだ。

そして、無限に広がる宇宙に繋がる色。

ちなみに緑はどうだろう。草木や森林など、緑は自然界にたくさんある色だ。

だから安心感があり癒されるのか。なるほど…。

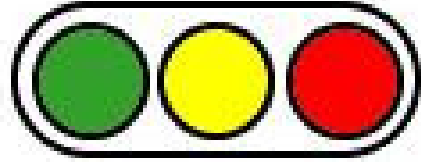
色の分析にはくわしくないが、やはり青と緑は完全に違う。

そもそも光のスペクトルが違うではないか！ 私が見ているのは青ではなく緑。

私にとって青信号は緑信号だし、青いリングは緑リングだ！

話が飛躍してしまったが、青と緑の違いには、やはりこだわりたい。

ところが、またしても半世紀ぶりに私の確信を揺るがす事件が起きたのだ！



果たして、青なのか？緑なのか？

青なのか緑なのか （その2）

それは、夫と母親と三人でドライブに行ったときの出来事だった。

ちょっと前になるが、近郊に新しい「道の駅」ができた。

最近ますます「道の駅」ブームで、新しいスポットが誕生すると、大変な混みようだ。

やはり、考えることは皆おなじだ。休日になると、地元の新鮮な特産物や美味しい物を求めて人々が押し寄せる。

なので、少し間をおき、平日をねらって出かけることにした。ところが、この目論みは甘かった。

「道の駅」に続く一本道、最初は順調だったのだが、やはり途中から大渋滞に巻き込まれてしまったのだ。

そして、私達は、ある大事なことに気がついた。ところで「道の駅」の場所って、どこ？

誰も正確な位置を把握していなかったのだ。したがって、あとどのくらい走ればよいかもわからない。

一本道なので必ず駅に繋がっていることは確かなのだが…お腹は空いてくるし、トイレにも行きたくなってくる…。三人とも、もうそれほど、堪え性はなかった。

引き返すべきか？ 進むべきか？ いつも、ここで私達の意見は対立する。

せめて「道の駅」までの距離が分かれば安心するのだが…。いつもながら、行き当たりばったりなので判断に迷ってしまう。

そうこうしながらも車はゆっくり前に進んでいた。

徐々に道路の見晴らしがよくなり、遠くのほうまで視界が開けてきた。

すると、夫が「あった！ あの緑の屋根の家の先だ」と叫んだ。

母親も、そうだそうだ！ と頷いている。

「やったー！ もうすぐだ！」道路脇に民家はほとんどなかったのに、緑の屋根はすぐに見つかった。

だが、夫の車は緑の屋根を過ぎても曲がろうとはしない。

「えーっ？ どうして？ 緑の屋根、もう過ぎちゃったよ〜！」

すると、夫と母親が口を揃えて「まだ過ぎてないよ。」と言うではないか！

「だって今の家の屋根の色、緑だったでしょ？」と指摘する私。

「なに言ってるの、青でしょ！」と夫と母が徒党を組む。そして、青だ！ 緑だ！ 論争が始まった。

2対1で絶対ピンチだが、負けずに、今回もじよっばる自分。

私には、どうしても青には見えなかったのだ。いったい、どっちが正しいのか？

その時、子どもの頃に抱いていた緑色・青色問題の記憶がよみがえった。

もしかして、ほんとうに私だけが緑色に見えるのかな？ 私の色覚がおかしいのだろうか…。

家族三人で終わりなき論争をしているうちに、車がやっとウインカーをあげた。

目の前に、緑の屋根の民家が確かにあった。これについては全会一致だった!?

だが、果たして、最初に見た屋根の色は、青なのか？ 緑なのか？

迷宮入りしないためにも、第三者も含めて是非もう一度訪れてみたい！



私流「○○って思ってるんだ」の術（その1）

生きてると色々なことがある。

他人から見たら大したことではなくても、自分なりには一大事。

今この時だって色々な事は起きている。

生きてる限り、人はみな現在進行形だ。

目の前の現実、自分が勝手に色づけしているだけかもしれないが…。

周りの人々や世の中の出来事にいちいち反応し、

一喜一憂するのは愚かなことかもしれないが、

それが情けというものではないか。

もちろん喜びや楽しみはたくさんあるけれど、

頭に来ることやキレそうになることだってある。

たいていは人間関係だ。

そして、不都合な状況に陥る度、どうして私はこんなに小っちゃい人間なのかと自分を嘆いてしまう。

この器の小ささ、どうにかならないものか？

毎度、同じことで気分を損ね、毎回同じセリフを吐く。

私はからくり人形か？ もはや自分が滑稽にさえ見えてくる。いったい何とかならないものか…。

外の世界とのつき合い方、人との関わり方。たしかに色々な考え方や対処法は山ほどある。

かつて、私も自分なりに知恵を絞り色々試してきた。独りよがりではあるけど、ささやかな人体実験を試みてきたのだ。だけど、たとえどんな素晴らしいと思われる方法でも、上手くいく時といかない時がある。完璧はない。ロボットじゃあるまいし、そりゃそうだ。

けれども、私はずっと探し続けていた。これぞという万能な秘策を。

この狭い自分のキャパのままに、この未熟なキャラを変えずに、

それでも、楽にハッピーに生きていける方法を！

そして、私はワタシなりの方法を編み出した。

それが私流「○○って思ってるんだ」の術だ！



私流「〇〇って思ってるんだ」の術（その2）

かくして、私はやっと有効な方法を見つけた！ もちろんエビデンスなんてとってはいない。

データは私一人だけ！ けれど自分にとっては信頼性が大だ。そうだ！ たとえ万人にとって有効な法則でも私に効果がなければ意味がない。

振り返ると、自分はいつも付和雷同だった気がする。

昔から見識も判断力もなかったけど、劣等感だけは負けない自信があった。根拠のない自信が！

そして、まるで悪あがきでもするように、巷に溢れる自己啓発書等を読み漁った。誰かが提唱する生き方指南に触発され、ときには感銘を受け、あるときには勇気をもらった。根がクソ真面目ゆえ、誰かの唱えた意見をわけもなく妄信し、ステレオタイプよろしく続いた。頑固なクソ真面目も、それはそれで、意味があったとは思う。今はすっかり忘れてしまった数々の教えだけど、私の血となり肉となり、自分の人生にたくさんの気づきをもたらしたことは間違いない。色々な世界観に触れ、考え方を知り学ぶことは素晴らしいことだし、今もその思いは変わらない。

さて、ここからが本題だ。それで、どうなったか？ ということ。

あるときから、私は「〇〇って思ってるんだ...」とひたすら感じてみることにした。

何がきっかけだったかは覚えてないけれど、とにかくそうすることに決めた。相手が不特定多数でも、決まった人でも、相手や自分の発した言葉をただ「〇〇って思ってるんだ」と感じてみる。

けれども、けっして「ふーん、だから何なの？」というクールな態度とはちがう。しいていえば眺めるという感覚に近いのか？ もちろん、偉そうに上から見下ろすという立ち位置とも違う (笑)

相手や周りの反応が自分の期待通りでなかったり、自分の意見や考えが否定されたと感じた時、この人 (自分) は、「〇〇って思ってるんだね」と…。良いも悪いもない。ひたすら眺める。ただ傍観者のごとく…。今さらだが、思うのは自由ってことだ。私も勝手に色々なことを思ってる。どんなに大切な相手だって、何を思うかはその人の自由だし、大事な権利だ。あまりにシンプルすぎて、当たり前のことだったのかもしれない。だけど、相手の反応に「なんで、そんなこと言うの？」「どうして、そんなことが言えるの？」と、いちいちイラッとしたり、チツとなり、激高するエネルギーは頗る激減した。

これは、家族間において、いちばん効果があった。身近な家族との関係で、私の、この、いちいち反応する思考すなわちスルーできない力？ がいちばん働いていたからだ。だが、相手や自分の放つ言葉に「〇〇って思ってるんだ…」といった間を置くことで、少しだけ余裕ができた。けれど、自分にとって、この少しの余裕は大きな変革だった。だからといって、まだまだ相手のことも自分のこともすべて認められるような器ではないが、生きるのが、がぜん楽になったことは確かだ。

そして、「今は」〇〇って思ってるんだ…というところ行きついた。「昨日言ったことと違うでしょ！」「この前と話が違うじゃないか！」この私の怒りの奥には、人は筋を通すべきだ！ という自分なりの大前提があった…。私の怒りの源には、自分に内在している無数の「こうあるべき」「こうすべき」大前提があるわけだけが、それはそうとして、こんな私のお怒り反応シーンでも、「〇〇さん、昨日はこう思ってたけど、今は、こう思ってるんだね」と感じてみることにした。こう解釈している私自身の思いにも、かなりの思い込みが入ってるのだが…。だから、私の思いも「今は」こう思ってるという感じかもしれない。

もしかして、日々、ただただ私が何かしら思い込んでいるだけなのかもしれない。私が自由に選んで色づけしている思い込み。

「〇〇って思ってるんだ…」という自体が、すでに私の思い込み。仮に、かなりの思い込みだとしたら、私が見ている世界はほぼフィクションなのかもしれないと思ったりもする。

けれど私流「〇〇って思ってるんだ」の術で、少なくとも自分が楽で幸せに生きられるなら、こんな素敵な思い込みはない！

7 7 億通りの愛のカタチ

何を信じるか

何に価値を見出すか

何が素晴らしくて

何が退屈なのか

何に感動して

何に嫌悪するのか

一人ひとり違うし

まったくの自由だ

頑張りたいときも

頑張らないときも

あったっていい

誰かにゆだねたい人も

孤独を楽しみたい人も

いたっていい

楽しんで幸せ見つけてもいいし

魂磨きながら成長してもいい

ブレずに真っすぐ突き進む私も

揺れながらフワフワと漂う私も

ぜんぶ自分の中にいる

結局なんでもいい

どっちでもいい…

愛は形を変えて

ぜんぶ自分の中にあるから



後出しジャンケンの女

勝負ごとに強くはないけど、ジャンケンだけは昔から自信があった。

だから、最終的にジャンケンで決めよう！ となると、俄然ヤル気が湧いてくる。

ヤッター！ 勝った!! ジャンケンと聞いたとたん、私は小踊りしてしまう。

なぜか負ける気がしないのだ。

大人になった今でもジャンケン勝負で決まる案件がある。もっばら身内だが (笑)

なので、ついつい物事をジャンケンで決めよう！ とけしかけてしまうのだが、家族からは評判が悪い。

と言っても、人生一大事の決めごとをジャンケンで決めてるわけじゃないので、悲壮感はない。

せいぜい、夜中にコンビニでアイスを買ってくる人や自販機でコーラを買ってくる人を決める程度の他愛のないゲームだ。

さて、ある時、夫が訴えてきた。後出しジャンケンなんじゃないか？ と。

絶好調の自分にあらぬ疑惑がかけられた。

後出しジャンケン？ そんな姑息な考え、私には微塵もないことを主張したのは言うまでもない。

ジャンケンと言えども不正はいけない。そんなのつまらないじゃないか！

ジャンケン道の極意は究極の確率ゲームだ。勝率は五分だ。

じゃ、どうして勝つのか？ 究極だが、たぶん勝つと決めて勝負してるから。

仮に私が相手より0,0000001秒後からジャンケンを出したとする。

けれど、私は、0,00000001秒前に、夫の出すであろうグーチョキパーをイメージしてるだけだ。ジャンケンには直感が重要なのだ！ とジャンケン道を語っているけど、夫からの疑惑は未だ拭いきれない。

だけど、自分は決して後出しジャンケンの女じゃないことだけは強調したい。

ところで、このジャンケン勝負、家族での勝率が高いということが大きなミソだ。

これがもっとオフィシャルな場面だったり重要なシーンだったらどうか？

たぶん、全戦全勝にはならないだろう。勝たねばならない！ 負けたらどうしよう…？

などとたんに余計な力みや邪念が出てきそうだ。

だから、勝つのが自然、幸運キタ〜！ という根拠のない自信が湧いてこなさそうだ。

少なくともリラックスはしていない。楽しいはずのジャンケンタイムなのに…。

ロシアンルーレットのように生死をかけるゲームじゃないにしろ、全身に緊張が入る。

少なくともリラックスはできない。身体の反応が楽しい状態ではないってことだ。

これじゃ勝ち目が無い、と思う（汗）

だから、勝っても負けても、どちらでもいいけど、

わけもなく楽しい♪という感覚が幸運を呼ぶのかもしれない。

これは、今この瞬間に幸運を呼び寄せる極意にもつながる気がしている。

とはいえ、負けてくれる相手がいればこそその勝利。

結局は、ジャンケン遊びに付き合ってくれる寛大な夫の掌で、

ただ転がされているだけなのかもしれない。

映写室の住人

自分を取り巻く
すべての他人の
言動や立ち振る舞いの
一つ一つが
気になってしまうのは、
あるいは、
激しく気に入らないのは、

私が単に寝不足だとか
腹がとても減っているとか
何らかの欲求不満による
エネルギー不足だからということは、
凝りもせず体験している

むしろ、
そんなことより
目の前に映し出される世界が
視力矯正手術をして視界良好となった
この目で見える鮮明なはずの日常が
どうやら
自作自演のフェイクだったことに
今さらながらに気づき落胆する

だからと言って

レーシック手術が失敗だったわけじゃなく
私がかもともと
視力 2,5 であったとしても
壊れた映写室から
映し出されるスクリーンは
相変わらず
私の望まない映像を見せてくれていただろう

望まない映像？

私はなぜ
望みもしない映像を
毎日見なくてはならないのか？

もしかして、
誰かに見せられているのか？

いや、
好きで見ているだけなんだ

お決まりの
ワンパターン劇場

登場人物の皆さん

お疲れさま
ありがとう
もういいよ

舞台に向かって叫んでも
スクリーンは何も変わらない

だから、
望まない映像が流れてしまったときは
時どき映写室にこっそり入って
手入れをする

パソコンだって
どんな優秀な機械だって
長持ちさせるにはメンテナンスが必要だ

簡単に取り換えることはできないからね
というか、一生ものだ

一人に一台・・・

だからと言って、
私の映写室から見える景色もまんざらではない

ときに世界でいちばん美しく
ときに時空を越えて輝き放つ

私だけの自慢のフィルム宝庫

色眼鏡？
すべてまぼろし？

もしも、
ぜんぶ幻想だというなら

本当は、
もうそんなに深刻にならなくたっていいんだ・・・

だけど、
人生が、
たとえ自作自演の悲喜劇なのだとしても、
監督不在じゃ上映する意味がない

かりに
もう這い上がれないほどの
闇を彷徨う私が映っていても
映写室の操縦かんだけは
けっして放しちゃいけない

人生のコントローラーを握りしめ、
明日はどんな世界を見ようか

奥付

KABOの漫筆草子

著 KABO

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
